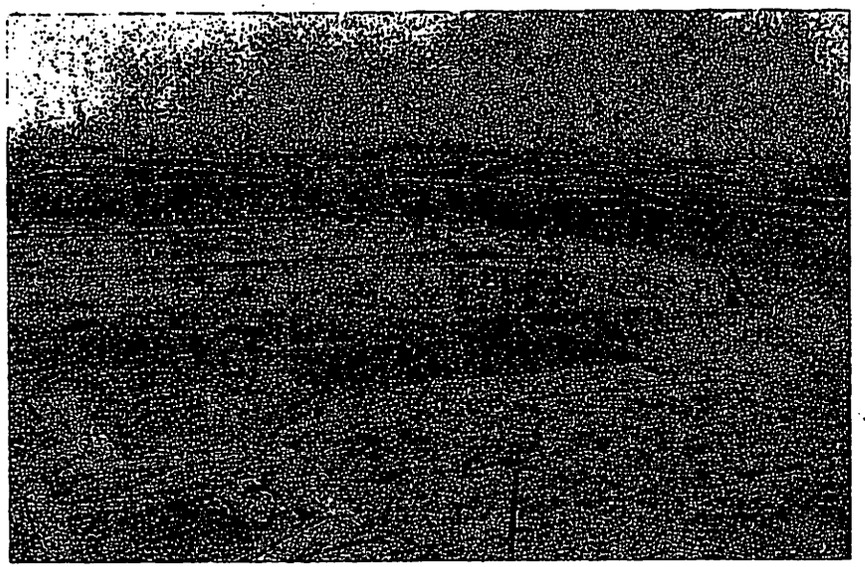
第五章　敗戦、再び廃墟のなかから

1　八月十五日前後

昭和二十年八月十五日正午、岡野校長と教職員、学生の一団は、四月夜半の空襲で焼け落ち、雑草の茂るにまかせた旧学生食堂跡に集まり、終戦の玉音放送をきいた。夏休み中だったので教官の多くは田舎に疎開しており、列席したのは黒沢清教授（のちの国大学長）や高林義雄庶務課長ら数名の教職員と、やはり空襲で焼失した学校工場（体育館）の跡片づけ等で勤労動員されていた百名ばかりの学生であった。玉音放送のあと、岡野校長は、要旨つぎのような訓示を行なった。

「日本は戦争に敗れたが、これで国が亡びてしまうわけではない。必ず再起できる日が来る。日本人はこれから隠忍自重、耐えがたきを忍んで、国の再建をはからなければならない。」

声涙ともにくだる演説だった。高林庶務課長は、「足もとの烈日にかわいた土の上にポタポタと落ちる自分の涙を、ただぼう然とみつめていた。その日のことを今も忘れない」とのちに記している（神奈川大学経済学会『商経論叢』、岡野鑑記博士古稀記念号、一九六六年六月、高林義雄「誤解を解く」）。岡野校長は、横浜大空襲のあった四月ごろから、胃かいようの症状が悪化、欠勤する日も多くなっていたが、四、五月の空襲後は、病身にむち打って、



廃墟と化した校庭　左に柔剣道場焼け跡

学校の被災後の善後策に奔走していた。八月十五日の前夜には高林庶務課長を自宅に呼び、翌日正午の天皇の放送内容を伝えるとともに、その時刻に教職員、学生全部を校庭に集合させ、ラジオが聴取できるよう手配を指示した。軍、官要路の人たちにも知り合いの多かった同校長は、すでに玉音放送の内容を察知していたのである。

だから高林庶務課長も、敗戦の冷厳なる事実をすでに前夜から知らされていたのだが、現実に玉音放送をきいてみると、さすがに万感胸にせまるものがあり、ほおをつたわり落ちる涙を禁じえなかった。その間、いろいろな想念が脳裡をよぎっては去った。出征する学生たちを見送った日々、知人の子息の遺骨を迎えた夜、かじかむ手をこすり合わせながら、学校工場の勤務につく学生たちを励ました冬の朝、御真影の安否を求め、火炎の切れ目をぬって学校構内を走り狂った四月大空襲の夜半――こうした辛労のすべてが、水泡に帰したというのであろうか。

この十五日未明のこと、陸軍の東京警備軍第三旅団に属する旭部隊横浜隊の、佐々木大尉に率いられる将兵に、横浜高工の学生数名を加えた約四十名の一隊が、終戦に反対して、軍用トラックに分乗して上京、鈴木貫太郎首相の私邸や平沼騏一郎枢密院議長邸を襲い、これを焼き払ったというウワサが、やがて街の人びとから伝わってきた。若ものたちは純粋で一途であるだけに、これまで信じ切ってきた価値観が、ガラガラと崩壊し去ろうとする事態に対するやり場のない憤怒から、こうした行動にも走ったのであったろう。これもまた、ついにむくいられることのなかった多数の人びとの死と労苦に対する、慟哭の表現であったにはちがいない。のちに東宝映画が八月十五日を描いた「日本の一番長い日」にも、波をかたどった円に「高工」の文字を浮かした、われわれには野球定期戦でおなじみの帽章をつけた高工生の一団が、首相私邸に突入する姿が撮し出されている。

高商の卒業生たちにも、いろいろな八月十五日があった。一回卒業生で、戦後富丘会を再建、その初代会長になったK・Yは、天津で終戦を迎えた。玉音放送を聞いた当座は、正直いってまったく信じられなかった。ソ連軍の侵入を受けた満州とはちがって、北支は日本軍がおさえていたし、中国大陸でも、少なくともK・Yの知る限り、日本の軍隊は負けてはいなかったからである。が、日ならずして敗戦の現実は、身のまわりにせまってきた。日本軍は武装解除、軍人以外の日本住民はみな職を失い、家の外は危くて歩けなくなった。売り食いの生活がはじまる。富丘会の天津支部長をやり、同地の日本人間でも重きをなしていたK・Yは、しぜん、そうした日本人仲間の世話役的存在になり、外の銭湯にいけなくなった人たちのために、自宅でフロをたいてやったり、一室を葬、将棋などの娯楽室に提供したりした。そうして、みんなのめんどうをみながら、無一物同然となって、故国へ引き揚げたのは、ようやく昭和二十一年になってからのことであった。のちに国大の経済学部長となる十四回生のO・Hは、終戦のとき満州にいた。満鉄（南満洲鉄道株式会社）の調査部で対ソ関係の仕事をしていたの

がたたったのか、敗戦後まもなくソ連軍から指名手配され、一年ちかい地下の逃亡生活を送らなければならなかった。五味川純平の大河小説『人間の条件』の主人公梶のそれにも似て、危険にあふれ、いくたびか殺されそうな目にもあう日々のなかで、かれは、学生時代に読んだロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』と『蹴せられた魂』を、くり返し読んだ。やがて故国に引き揚げてから、インフレと生活苦と、それに病身ともたたかいながら、自分の学問を根本からきたえなおして再出発する勇気を支えてくれたのは、地下生活中に読んだこの二冊の本であった。

高商十五回生のM・Aは、横須賀の海軍鎮守府で八月十五日を迎えた。短期現役の主計大尉として、当時逗子の山中に疎開していた横鎮施設部のバラック庁舎に詰めていたかれは、同日正午、同部の男女職員とともに玉音放送をきいた。「東部軍管区情報！空襲警報発令！」の放送でおなじみだった、古ぼけたラジオからきこえてくる天皇の声は、その独特の抑揚も加わって、かなりきき取りにくかったが、それがかえって荘重さを増して、あふれくる涙と嗚咽をおさえることができなかった。

その後の数日間、空からは、厚木の三〇二海軍航空隊基地を飛び立った零式戦闘機（ゼロ戦）が、「玉音放送はニセものだ、断乎決戦あるのみ！」というビラをまき散らしては、飛び去っていった。荒武者のきこえ高かった三〇二空司令の小園海軍大佐が、部下の戦闘機乗りたちとともに、抗戦を主張して譲らなかったのである。しかし、この反乱の企ても、小園大佐が監禁されて、日ならずして鎮圧され、八月三十日にはマッカーサー連合軍総司令官が、空路厚木に進駐してきた。逗子の海に面した相模湾には、アメリカの軍艦が何隻も入ってきて、威圧するように黒々と、指呼の間に浮かんでいた。江戸幕府末期の日本人たちを驚かした「黒船」がそこにあるような、底しれぬ圧迫感であり、玉音放送だけでは、なかなかにからだのシンまでは納得できなかった敗戦の現実が、

そこにはあった。九月のなかばすぎであったか、M・Aは復員して郷里に帰った。

のちに国大に進学し、その三回（昭和三十年春）卒業生となるK・Mは、二十年八月当時東京の中学一年生で、宵森に疎開していた。都会地の小学校学童疎開は、すでに戦局の緊迫した十九年の六月から第一次が実施され、二十年の三月からは、東京、大阪、名古屋、横浜、神戸、川崎など十三都市の学童が全部、強制集団疎開で田舎に散っていた。中学生になっていたK・Mは、個別任意疎開の組であったが、八月十五日の玉音放送は宵森できいた。何が何だかサッパリわからなかった。夕方ごろになって、どうやら日本は負けたらしい、とわかった。子供ごころにもそれは悲しいできごとに思われたが、育ちざかりの少年には、そんな悲しみを一日も心にとめてはおけない、毎日の躍動があった。やがて二十一年の一月、スシ詰めの列車にゆられて帰ってきた東京は、一面の焼け野が原、空は青くきれいにすんでいた。あちこちにヤミ市が立ち、戸板の上に積まれたミカンの黄色が、とても新鮮にうつった。東京では、サトウ・ハチロー作詞、並木路子うたうところの「リンゴの唄」が大流行していたが、リンゴの国・宵森から帰ってきた少年の目には、ミカンの色がひどくなつかしかったのである。

そのころ母校では、冒かいようをおさえて終戦直後のめまぐるしい校務処理にあたっていた岡野校長が、九月九日、文部省に打ち合わせにいって帰宅した夜、ついに吐血、同月二十五日東大病院に入院せざるをえなくなった。高林庶務課長が三日にあげず、見舞いをかねて、状況を報告したり、相談したりのため、交通混乱のなか、横浜―東京間を往復していた。これよりさき、四月夜半の空襲で教務課が焼夷弾でやられたため、昭和二十年度の新入生の名簿が焼失していることがわかった。このため、帰郷している一年生を呼び集める方法がない。京浜地方の同級生で、学校に出てきたものたちに手わけして調べてもらった結果、八月十五日現在、十一名が行方不明とわかった。

その後も調査、追跡をつづけた結果、最終的には、四名が空襲で死亡したものと確認された。学生の親たちが学校に出てきて、「せがれは家にもどっていない」ということが話され、死亡を確認せざるをえなかったのである。動労動員先の工場や下宿で、災禍にあったものと考えられる。戦争の犠牲はここにもあった。

戦争中の辛労と敗戦のショック、戦後の悪性インフレと〝竹の子〟生活は、人びとを疲れさせ、八月十五日正午、学生食堂の焼け跡に集まって玉音放送をきいた教職員のなかからも、三人の人たちが、その後まもなく、あいついでこの世を去った。敬虔なクリスチャンとして知られていた商品学の南種康博教授、教練教官の小白寛大尉、教務課職員の湯川真蔵書記であった。湯川書記は〝エノケン〟のニックネームで、歴代の学生たちに親しまれていた。小柄なガッシリしたからだに、濃く太いマユ、その下にきらめくまるい目が、俳優の榎本健一そっくりだったからだ。学生たちがうっかり「エノモト先生」と呼びかけて、同書記を苦笑させたことも、一再ではなかった。心から学生を愛し、親身の相談相手として、同書記の世話になった学生は数知れない。そのひとりであった十五回生のM・Aは、同書記が隠れたマルキストであることを知る。

三年生のころ講演部の幹事をしていたM・Aは、ある日、いっしょに講演部活動をやっていた同級生のS・Sと連れ立って、井土ヶ谷にひとり住んでいた湯川書記の自宅を訪れた。やもめ暮らしの乱雑さにあふれたその居間には、うず高く唯物論関係などの本が積まれていたが、その棚間に高々と掲げられたマルクスの肖像を見た瞬間、M・Aは思わず息をのんだ。昭和初年の四・一六共産党検挙事件で、長兄を犠牲にされたM・Aは、思想統制のきびしくなっていた準戦時体制下のこのとき、マルクスの肖像をどうどうと掲げている湯川書記に、あらためて畏敬の念を抱くとともに、いいしれぬ親しみを覚えたものであった。

戦時中休眠を余儀なくされていた同書記の思想活動は、戦後民主主義とともに開花した。民主主義科学者協会

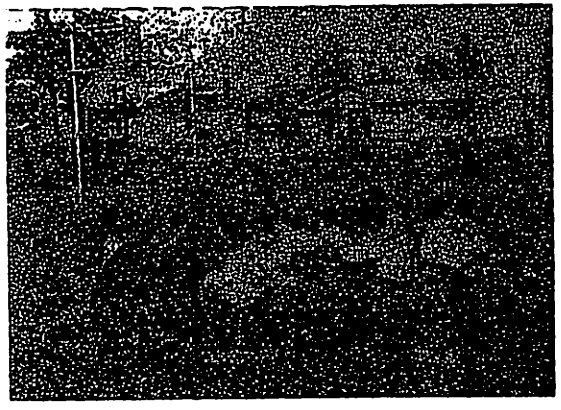
神奈川県支部の創設に奔走して、その事業部長となり、横浜自由大学を開設したり、市内専門学校教職員組合協議会の結成に骨身をけずる一方、市民講座開催にも努力、その活動はめざましいものがあった。しかし、その過労が、同書記の生命を奪う一因にもなった。その訃報がもたらされた昭和二十二年九月四日の夜、高林会計課長（庶務課長から当時会計に転じていた）は、取るものも取りあえずかけつけ、その棺前に号泣した。高商の草創時代にあい前後して事務局に入り、以来、ともにはげまし合って仕事をしてきた仲であった。高林課長はつぎのように記している。

「唯物論者だったかれ、宗教を否定していたかれである。死そのものがかれのすべての終止符であり、消滅である。けれども、かれはなお僕の思い出のなかに生きている。」（『横浜高商新聞』、昭和二十二年――号数不明――高林義雄「おもかげ」）

2　頼まれて卒業した二十回生

――岡野校長、富成教授のことども――

学校では二十年九月下旬、第二十回生の卒業式が行なわれた。郷里に帰っていたI・Tは、戦争までのように学生服にゲートルを巻いて、学校に出ていった。集まる学生の数は少なかった。戦死したもの、復員してから、栄養失調と過労で死んだものも多い。十八年に入学するとまもなく、動労動員が、一年間の三分の一の期間に強化され、高工との野球定期戦は中止、翌十九年春からは、動労動員に一年間の通年制がとられて、四六時中、京浜地帯の軍需工場や横須賀の海軍工廠にかり出され、学校工場への動員がそれにつづく。勉強らしい勉強のまる



卒業式

でできなかった二年半であった。

「学生時代をふりかえって、記念になるようなものは何も残っていない。卒業のアルバムもなければ、教科書もない。思い出だけが残り、その思い出はすべて暗い。だから、われわれの同期が集まると、そういう話ばかり。せめて生き延びられたのがしあわせだったという、いつもの結論になる。」I・Tはこのように語っている。それに、かれの手もとには卒業免状もないのだ。二十年の九月に学校に出ていったのは、卒業するためではなかった。それまでの二年半、ろくな勉強ができなかったし、もう戦争はおわったのだから、当然くり上げ卒業が廃止になり、あと半年学校にいけるものと思っていた。岡野校長の病気中、副校長格で校務に当たっていた徳増栄太郎教授のところへ、I・Tはねじこんでいった。

「ぼくたちは授業らしい授業はほとんど受けていない。それがなんで卒業になるんでしょうか？ もう少し学校に置いて下さい。」

真剣に談じこむI・Tを見詰めながら、当惑しきった様子で、徳増教授はつぎのように答えた。「海外からも学生が復員してくる。内地の部隊からも帰ってくる。学校がいっぱいになってしまうんだ。要するに、君たちに席をあけてもらわないと、お手上げになってしまうんだよ。君たちには本当に申しわけないが、どうか頼むから卒業してくれないか。」

「これにはまいっちゃってね。高商・国大五十年の歴史のなかでも、学校に頼まれて卒業したのはぼくたちの期だけじゃないかと思って、いまでもこの徳増先生の言葉だけが、印象に残っている。」I・Tは後日そういう笑い話をしているが、当時はもちろんそれどころではなかった。終戦と同時に、それまで生産活動の中枢を占めていた軍需部門が機能を停止したから、工鉱業生産は二十年末には、戦前平均の一三％に落ちこみ、二十一年四月になっても、その二〇％にしか回復しなかった。一方、軍隊からの復員に、海外からの引き揚げが加わって、労働人口は急激にふくれあがり、街には失業者があふれた。二十一年春ごろにはその数約六百万人、半失業者をあわせると、一千万人を超えるとみられていた。戦後インフレは日ごとに高進し、労働者の実質賃金は、戦前の四分の一から五分の一に低下した。また、二十年秋の産米は、戦前平年作の六割、三九一三万石に落ちたから、米の配給もとだえがちだった。こうして人びとは空腹をかかえ、ボロをまとって、焼け跡に急造されたバラックに、雨露をしのぐ毎日を送ることになったのである。I・Tたちは、こうした状況のまっただなかに放り出されようとしていた。

のちに国大の工学部となる横浜高工でも、九月下旬にこの期の卒業式が行なわれたが、戦時中すでに就職がきまっていた会社からの採用中止申し入れがあいつぎ、行く先きのあてがない約半数の卒業生が、戦時中の勉強不足を補う理由から、研究生と称して学校に居残ったという（『横浜国立大学工学部五十年史』）。高商・国大の全歴史を通じて、これほど暗澹たる卒業はなかった。最も不憫な卒業生たちだったというべきであろう。

だから、I・Tは徳増教授に「頼むから……」といわれたものの、納得するわけにはいかず、卒業式をボイコットして本館の屋上にあがってしまった。したがって、卒業証書はもらわずじまいになった。屋上から見渡す横浜市街は、ただ茫々たる焼け野が原であった。ややあって、黒人のアメリカ兵が屋上にあらわれた。おまえは何

ものだ、ときく。ここの学生だと答えると、ゲートルを巻いているのはおかしい、戦争はもうおわったんじゃないか、という。そういわれればたしかにおかしかった。米兵は屋上の人影を不審に思ってきたらしいが、卒業式に出てきた学生とわかると、「オレは学校を出ていない。おまえは学生でいいなあ」という意味のことをいった。しかし、学生であることも、きょうでおわりだ。明日からは焦土におおわれた社会に飛び出していかなければならない。I・Tは、眼前に見はるかす惨澹たる光景が、重苦しく心にのしかかってくるのをどうすることもできなかった。

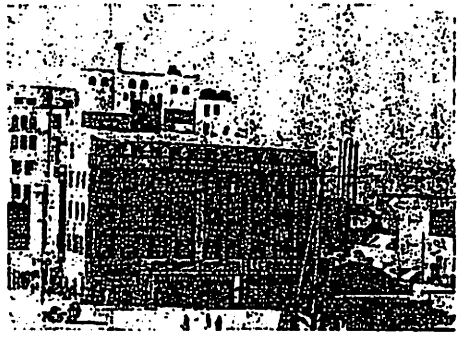
そのころ学校は、富士見ヶ丘に進駐してきた米軍部隊と〝共同生活〟をしていたのであった。八月十五日から一週間ぐらいあとに、沖縄で歴戦した米軍の一個中隊が、横浜港から水陸両用戦車で上陸し、一路富士見ヶ丘めざしてやってきたのである。その日はもう夕方になっていた。ちょうど黒沢清教授が、学生数人とともに、本館の一室に宿直しており、夕食のお米がわりに、落花生でいった大豆を食べているときであった。学校はこの一個中隊によって、たちまち包囲されていた。米兵は本館のなかにも侵入してきたが、黒沢教授が応対にあたると、さいわいにして中隊長はモノわかりのいい人物だったようで、すぐ全員を本館から出して校庭に集め、そこにテントを張って宿営を開始した。

黒沢教授は、翌朝、こんどは英語の伊東弥教授と連れ立って、兵隊を本館に入れないように、中隊長にかけ合いにいった。隊長はすぐ承知してくれて、学校の建物の入り口全部にチョークでオフ・リミットと書き、また、本館裏の左手、プールのところから、反対側の富士見寮――そのころ空襲で焼け落ちたままになっていたが――付近の道路のところまで、一直線を引き、そこにもオフ・リミットの印をつけてくれた。こうして学校は、本館とその正面、その横側を従前どおり使用できたが、校庭のほとんどは、米兵の占領するところとなってしまった。

そんななかで、二十回生の卒業式が行なわれたのである。この奇妙な〝日米平和共存〟の状態は、それから数カ月つづき、翌年春になって、米軍はようやく厚木に去っていった。学校は二十年九月に形ばかりの授業を開始して、同十二月から翌年の二月まで長期の食糧休暇に入ったから、トラブルらしいトラブルも起こらずにすんだが、敗戦の現実は、こういうかたちでも押し寄せてきたのである。

戦時中の十九年に高商が衣がえさせられた「横浜工業経営専門学校」は、二十一年三月に廃止され、学校は「横浜経済専門学校」一本に統一されて、十九年度、二十年度に工業経営専に入学した学生たちは、それぞれ経専に編入された。こうして、工業経営専はいわば、戦争中の〝まぼろしの学校〟におわった。この間岡野校長は、東大病院に入院して胃の切開手術を行ない、療養中のまま、二十年十一月二十四日付で休職となり、後任には、文部省から糸魚川祐三郎校長が着任した。岡野前校長は二十年の暮れには退院したが、二十一年の三月三十日付でその退官が発令された。その辞任は、必ずしも岡野前校長自身の本意ではなかったようで、東大病院に見舞いにいった黒沢教授に対して、同校長は、「入院中にやめさせるとは……」と、慨嘆久しくしていたということである。

敗戦後、ほうはいとして日本全土にまき起こった戦後民主主義の運動のさなか、高商の学内にも民主化を求める動きが強まり、戦時中のできごとのことごとくを、岡野前校長の責めに帰するような行きすぎもあったようである。たしかに岡野式のスパルタ教育で、富士見寮が「養正塾」になったり、クラスの名称が忠、誠、勇、武にかえられたり、軍国調が色濃く打ち出されたことは認めなければなるまいが、横浜工業経営専門学校への衣がえなど、岡野校長のあずかり知らぬところで、すでに路線が決められていたことも多かった。当時の高林義雄庶務課長が、前掲、神奈川大学経済学会『商経論叢』（一九六六年六月、岡野鑑記博士古稀記念号）に「誤解を解く」という



終戦直後のヘマ市街

う一文を戦せたのは、この間の事情を明らかにし、岡野校長に加えられた誤解を取り除くねらいであった。同校長はその後神奈川大学教授として再起するが、その間苦難の途も歩まれたようで、まことに戦時下悲運の校長といわなければなるまい。

哲学の富成喜馬平教授も、終戦直後みずから富士見ヶ丘の学園を去った。戦争までの高商の学生には、三年生にいたるまで、毎週一時限ずつの「修身」の授業が課されたものだが、富成教授は昭和九年横浜に着任以来、この修身を担当した。中学や商業学校までの修身は、今日のいわゆる道徳教育、それも尽忠報国を説く軍国調のものだったので、学生たちは、やれやれ専門学校に学ぶ身になってもまだ修身があるのか、というのがいつわらざる気持ちだった。しかし、富成教授の「修身」はちがっていた。たとえば、昭和十二年ごろには、カール・ヒルティの『幸福論』をテクストとして、若ものたちに、冷静な広い視野でものごとを理解し、判断する態度を教えたのである。それは少しもいわゆる道徳教育ではなかったが、常に真摯に、深い理解をもって、しかも情熱的に学生に接した同教授に対して、若ものたちは強くひかれるものを覚えた。まもなく富士見寮の寮監となり、とくに、昭和十二、三年ごろの寮生（十四、五回生）たちは、しばしば大ストームをやって、先生に迷惑をかけたものだったが、それでもなお、学生たちのもっとも敬愛する教官のひとりであった。

その富士見寮が、戦争末期に「養正塾」に名前をかえ、すっかり軍隊式になった時代にも寮監であったことへの、きびしい自省が、同教授をして横浜から去らしめたのであるかもしれない。のちに国大の教授となる二十一

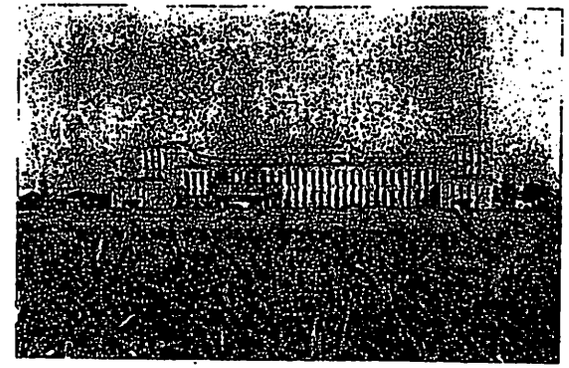
回生のU・Aは、同級生のA・Cとふたり、横浜から東京都下小金井に引越していく同教授の荷物をはこんで、別れを惜しんだ。U・Aの入学した昭和十九年春から、学校は横浜工業経営専門学校となり、富士見寮は「養正塾」となったが、その養正塾に入って第一回目のコンパのとき、「友の愛いに泣くは多し、されど友の喜びをわが喜びとする人が、幾人おろうか」と、友情論に熱弁をふるった富成教授の国民服姿が、U・Aの心をすっかりとりこにした。以来U・Aは、同教授が主宰していた哲学同好会にはせ参じ、岡倉天心の『茶の本』の読書会や、その他同教授を中心とする集まりを通じて、読書やものの考え方について、大きな影響を受けたのであった。

小金井の新居まで送って荷物を置くと、教授はU・A、A・Cのふたりに、ひと袋ずつの黒砂糖のかたまりを手渡した。「遠いところまで本当にありがとう。何もないので、これを取っておいてくれたまえ。」そういって教授はふたりの労をねぎらった。そのときの情景が、いまもU・Aの頭のなかにこびりついている。富成教授はその後まもなく大分経専（大分高商、今日の大分大学）に転じたが、まだ戦後混乱の去りやらぬ二十二年に他界された。富士見寮中のガラスを割るストームをやって、同教授に世話をやかした張本人のひとり、十四回生のM・Yは、次のように記している。

「先生は私どもの青春時代とともに、遠いかなたへ去ってしまわれたけれども、その想い出は常に新しく鮮やかに、私どもの胸のなかによみがえってきます。」（『富丘会報』第十三号、高商十四回・御手洗康「富成先生のこと」）

3　「豚眠寮」異聞

——終戦直後の学園風俗　その一——



本館と鉄器庫を残したキャンパス

学校の施設は荒れ果てていた。学生控所、食堂、柔剣道場、富士見寮など、木造部分のほとんどを空襲で焼かれ、残ったのは、かつての〝白堊の殿堂〟とボイラー室ぐらい。体育館（学校工場）は、アメのようにまがった鉄骨だけが残っていて、体操の下津屋俊夫教授がそのかたわらにたたずんでは、「ぼくの設計でできた日本一の体育館がこんなになって……」と涙ぐんでいた。白堊の本館も、外壁は油脂焼夷弾の煙にこげて、うす黒くよごれ、内部は爆弾でやられてヒビが入り、雪や雨が降るとポタポタと水がもってきた。

そんななかに、学生たちがぞくぞくと集まってきた。在学中の出陣からの転入学も加わったから、若ものたちのほとんどが軍服に軍靴といういでたち。学生服を着ているほうが少なく、学園はカーキ色にいろどられた。

学校は二十一年の二月から本格的に授業を開始したが、暖房も入らないので、教室のなかは寒くて困った。「雨の日には天井から水が落ちてきて、教室に水がたまる。足がぬれないよう机の下の横木に両足を乗っけ、ツマ先立ったような格好で授業を受けた。」高商二十二回生のI・Rは、このように語っている。昭和三十六年、富丘会の寄付によって学園の緑化事業が完成したとき、国大の学長となっていた黒沢清教授は、終戦時の学園をかえりみて、次のように記している。

「新制大学としての本校の発足は、昭和二十四年のことでありますが、それまでの四年間というものは校舎

も校庭も、廃墟にひとしく、復興するに必要な予算は、インフレーションの波に押しつぶされて、文部省からほとんど一文も与えられなかったといっても過言ではありませんでした。スズメの涙のような校費および人件費が、予算として与えられたことは与えられたが、人件費は毎日の食費に足らぬ給料となり、物件費は、校舎の雨もりを防ぐに足りませんでした。こうした時期に（中略）、多くの卒業生諸君が、母校はどうなったかとぞくぞく来訪されたわけですが、そのかわり果てた姿をみて、おそらくは涙を流しながら、この丘を立ち去られたことだろうと思います。」（『富丘会報』第十六号、黒沢清「終戦時の学園を顧みて」）

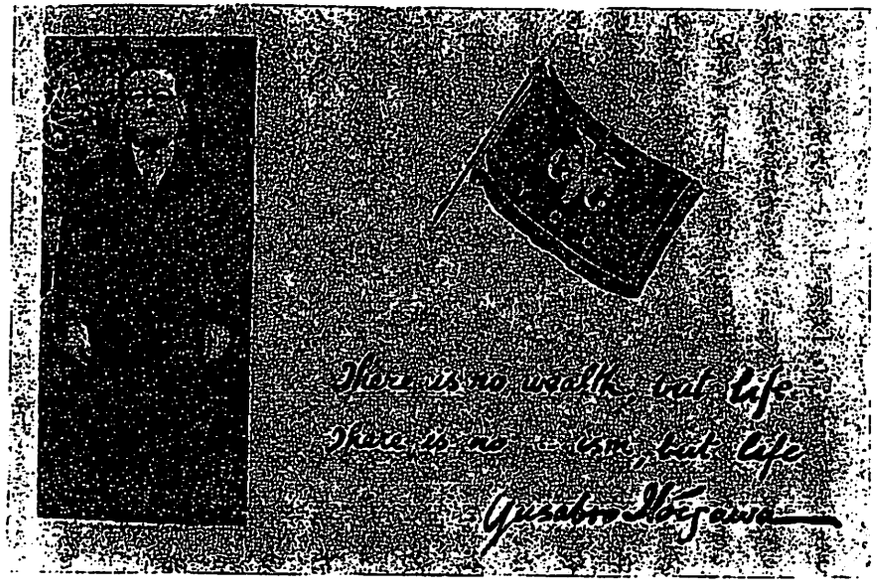
二十二回生のI・Rたちは、二十一年春、後述のようにひとさわぎあったのち、とにかく二年生になった。ところが、紙もない、本もない時節であった。あちこち一生懸命探してノートブックを買ってきて、先生が講義するのをみんなが筆記する、あとでノートをお互いに見せあって、一円の講義録を作ったりした。そのころになって、ようやくお粗末な本が出まわるようになった。薄っぺらな仙花紙を使っているので、裏側に印刷された文字がすけて見え、暗がりではとても読めない本である。それでも、戦争まで禁止されていた反体制の『資本論』だとか、今日でいうポルノ本のたぐいがドッと本屋の店先きにあふれた。なかに、十五円払い込んだら、『資本論』の訳本を一巻から六巻まで配本するというのがあって、カネを払い一巻目をもらったら、インフレで、二巻目以降はパァになり、「そんな風で、一巻しか買わなかった本がずいぶんある」とI・Rは語っている。

これよりさき、二十一年の二月十七日、インフレ抑制のための金融緊急措置令が公布され、十円札以上（同月二十二日から五円札以上）の紙幣が新紙幣に改められた。同時に預金封鎖が行なわれて、給与の支払いも現金は五百円までに制限され、いわゆる五百円生活がはじまっていた。しかし、その年春から年額二百四十円（戦時中までは八十円）に上がっていた経専（高商）の授業料は、封鎖預金から払うことができたばかりでなく、年に一回か二回、

書籍購入資金も封鎖預金から現金化することができた。しかも、何をいくら買ったという領収証がいるわけではなく、何の本がいくら、何がいくらという見積もり書を学校に出すだけで、学校が証明書をくれる。それを、封鎖預金のある郵便局なり銀行に持っていくと、現金で二十五円出してもらえた。「これがぼくらのこづかいにはならないで、オヤジが商売の運転資金に使ったこともある」と、I・Rは、預金封鎖時代の〝生活の知恵〟を明かしてくれた。

学生食堂は焼けてしまってなく、しかも米は配給制だったので、昼メシは各自弁当を持ってくる。地方からきて下宿している学生も、田舎から米をかついできて、下宿で弁当をこしらえてもらった。弁当の盗難もあった。カバンを置いて、よそで何かやって帰り、さてメシを食おうか、とカバンをあけてみると、弁当箱がない、といった事件だ。しかしだいたいが「きょうはおまえの弁当半分食わせろ、明日はオレがイモを持ってくるから……」といった調子で、弁当も自分だけのものじゃなく、共同の弁当みたいになることもあり、下宿していて米の食えないやつには食わしてやる、という風情であった。

「みのや」のおばさんの店が復活したのも、そうした昭和二十一年からだった。本館一階の、もと教官食堂だったところに店が開かれた。おばさんは、二十年四月の空襲で学生食堂が焼け落ちたあとも、高商にかよいつづけ、学生たちにパンを供給していた。おばさんの弟さんが軍関係にコネがあって、将校用の白いパンが手に入ったので、毎日五十人分ぐらいを、忠、誠、勇、武の各組交替で、順ぐりに買ってもらうことにしていた。やはり食いものに不自由な時代だったので、学生たちに奪ばれたことはいうまでもない。五月二十九日も朝暗いうちに通町三丁目の家を出て、高商にきていた。午前九時ごろであったか、黒沢教授の部屋にいたときに空襲がはじまった。みるみるうちに、二百発ぐらいの焼夷弾が降ってきた。富士見寮が猛煙をあげて燃えはじめた。



糸魚川校庭とそのモットー

その後、二十年の後半ごろになると、さすがのおばさんにも売るものがなくなってしまって、一年ほどは高商にもごぶさたしていた。すると、「おばさん、また学校にきてくれよ」と、学生が迎えにやってきた。おばさんとしては、インフレでコストが猛烈にあがり、高く売らなければ引き合わなくなってきたので、商売をするのがこわかった。進駐軍――米軍のことを当時人びとはそう呼んでいた――から手に入るコーヒーが、いっぱい十円につく。戦前は十銭だったから、百倍の値段だ。それでも、学校はなつかしい、学生さんも好きだ。おばさんは、やっぱり高商にかようことにした。以前と同じように、朝の五時ごろから通町の店を出て、富士見ヶ丘にのぼってくる毎日がこうして再びはじまった。しかし、まだたいした売りものはない。当時松屋の付近にキャンプを張っていた進駐軍の食べものに、余りものが出る。といっても、食べかけはもちろん捨ててしまうの

だが、手つかずのものだけを集めて、それをようかんのようなものや、ケーキのようなものに加工する業者がいた。おばさんはそれを仕入れてきて売った。いくらかでも、学生のハラのたしになればいい、というつもりだった。

学生のなかには、田舎から米だけは持ってくるが、おかずがなくて困っているものもいた。戦時中からの仕きたりで、教職員が校庭の一隅を掘り起こし、サツマイモやネギなどを作っていた。おばさんはそこからネギを引っこ抜いてきて、米のメシを、これも進駐軍払い下げのバターでいため、ネギをきざみこんで、学生にチャーハンをつくってやった。本業よりもそのほうが忙しかった。その間は、学生が店番をしてくれた。昭和二十六年ごろ、学生食堂が復活するまで、そんな状態がつづいた。しかし、モノには不自由しても「お互いに心のふれ合ったいい時代だった」と、おばさんは回顧するのである。

「豚眠寮」が誕生したのも、そんなときであった。本館のまうしろに、三十坪ほどの銃器庫が焼けずにポツンと残っていた。窓のほとんどない、倉庫状の建物だったが、我慢すれば住めないことはない。二十二回生のY・EとM・Mのふたりがこれに目をつけた。昭和二十二年の春ごろ、三年生になったふたりは、下級生の何人かとも語らって、学校に交渉し、そこにタタミを敷かせて住みついた。以来、昭和二十四年十月に富士見寮が再建されるまでの二年半、ここで寝食を共にした学生は、四代にわたり二十名にのぼる。

ダルマストーブがひとつ置いてあり、そのあたりで、男やもめどもがなれない手つきで煮たきをするので、それは大へんなことではあった。しかし、学生たちにとって、当時はそこが唯一の共同生活の場であり、学寮であった。いつか人呼んで「豚眠寮」という。豚小屋のような環境で眠ったということか、あるいは豚のようによく眠ったという意味か、たぶんその両方だったのであろう。とにかく、ほかには何にもないところに、フトンを敷

いて寝るだけの殺風景きわまる学寮ではあったが、そこでの集団生活は二十名ばかりの住人たちに大きな影響を与えた。卒業後いろいろな職場に散ったこの寮生たちは、昭和三十年代の後半から集まり合って「豚眠寮大会」を催し、近年では毎年その会合を開き、寮監だった商品学の河野五郎教授（現国大経営学部教授）らを招いて、旧交を温めあっている（『宮丘会報』第四十号参照）。

後述のように対高工野球定期戦は昭和二十一年から復活したが、野球部の合宿も、この豚眠寮を利用して行なわれた。寝泊りできるような施設はここしかなかったのである。野球部の合宿がはじまると、当時学生自治活動の中心になっていた二十二回生の前記I・Rらが相談して、野球部へのカンパを学生たちに呼びかけた。「コップいっぱいのウドン粉でもいい、ジャガイモひとつでもいい、タバコ二本でも三本でもいい。何でもいいから出してくれ。おまえらもハラをすかしているだろうけれども、定期戦はとにかく勝たねばならない。野球部のやつらが少しでもハラをへらさないように、助けてやってくれ。そういって、みんなから出してもらったものを、豚眠寮にいる野球部のマネージャに、これだけみんな持ってきてくれたから、食ってくれよ、と渡したものです。」I・Rはこのように述懐している。

4　運動部、サークルの再建

——終戦直後の学園風俗　その二——

食うものがない、カネがない、寝るところもないというなかで、カーキ色の軍服や国民服をまとい、軍靴を引きずった若ものたちは、キャンパス・ライフの再建にはく進した。敗戦直後、その中心になったのは二十一回生

「芸術は民衆と共に」

たちだった。敗色すでに濃くなった昭和十九年、横浜工業経営専門学校に転身した学校に入学、二十一年、工業経営専の廃校とともに経専生となって、二十二年春卒業という珍しい回であり、また、二十年九月、二十回生たちが史上もっとも不憫な卒業をしたあと、三年生のいなくなった学園で、一年半にわたり、最上級生の責任を負わされた回でもある。

そうした二十一回生のなかでも、学友会の総務委員長だったY・Mらがリーダーになって、運動部、文化各部がぞくぞく再建された。二十年の十月、軍隊組織化されていた学校報国団が解体されて、学友会は学生の自治組織になったが、まだその後のいわゆる学生自治会には移行せず、学友会の名称もそのままだった。ただ、教官が各部の部長や副部長になるということはなくなり、各部の運営は学生の責任に委された。いわば学生組織の過渡期のころであった。運動部は野球部をはじめ、庭球部、ラグビー部、競技部、水泳部、卓球部といったところ、文化部は科学研究部、経済学研究会、文学研究会、英語研究会、グリークラブなどがあいついで誕生した。

何しろ二十一年の三月までは、二年生と一年生しかいない。復員学生や軍関係学校からの転入で、しだいに学生の数がふえ、二十二回生（当時の一年生）の場合、終戦時より八十数名多くなったが、それでも運動部や文化部の数がふえてくると、部員のなり手が不足した。そこで、二十二回生のI・Rなどはいくつもの部に関係した。

「卒業アルバムを見ていただくとわかるように、いろいろな部に私の顔が写ってますよ。大勢でやらなきゃ、いろいろなことができなかったのです」と、かれはいう。大正十三年の春、弘明寺の高工内仮校舎で、高商生の学生生活がはじめてスタートしたときと、似たような状況と思えば、まずまちがいはないだろう。そのときは、大震災の廃墟のなかからの出発であり、いまは、敗戦による空襲の廃墟のなかからの再建であった。

テニスコートは、戦時中からイモ畑になっていたり、防空ごうが掘られていたのを埋めもどして、ローラーを引いた。学生たちは、くる日もくる日もローラー引きに明け暮れて、やっとのことでこしらえ上げたのである。それでも、砂利とか砕石といった資材は手に入らなかったので、硬球のコートにはできず、軟式コートに仕上げるのがやっとのことだった。科学研究部という戦前にはなかった部が誕生したのは、戦時中の工業経営専門学校で、技術的なことに多少首を突っこんだ経験の名残りであると同時に、軍払い下げのトラックが一台あったからだった。前記の総務委員長Y・Mらがあちこち走りまわって、もらってきたものだったが、荷台などはついてない、四角に組んだ材木が、荷台がわりにシャーシーの上に乗っかっているだけ、というシロモノだった。科学研究部は、校庭にナワを張ってそのなかを自動車教習場とし、学校が雇ってくれた海軍復員者のKという運転手を教師に、自動車運転を習った。学校が雇ったといっても、前記の黒沢教授の回顧談にもあるように、当時文部省からは雨もりの修理費ももらえない有様だったから「運転手の人件費をひねり出すために、大へんなヤリクリをしたもんです」と、高林会計課長は後日述懐している。もちろん、ガソリン代や、荷台をつけるカネはなかなか出てこない。そこで、当時横浜駅の西口に高商の先輩がやっている木工場があったので、そこに運転手ごとトラックを貸して、今でいう白トラをやって資金をかせぎ、やっと車体に荷台を取りつけることができた。こうして、このトラックがやがて、学校の運動会や野球定期戦のさい、学生にくばるイモの買い出しに、その機動力を発揮

することになるのである。

科学研究部は写真屋もやった。きっかけは二十二回生の卒業アルバムだった。街の写真屋に頼んでも払うカネがない。また、そろいのアルバムが学生の数だけあるかどうかもわからない。そこで、アルバム委員を兼ねていた二十二回生のI・Rらが中心になって、科学研究部の予算で引き伸ばし機を買い、これを商品実験室の奥にあった暗室に据えた。そして、アルバムは各自に思い思いのものを買ってもらい、キャンパス・ライフの写真は科学研究部員が撮影して、この引き伸ばし機で伸ばし、みんなに売った。こうして卒業アルバムができた。だから、かれらのアルバムはみんな、形もデザインもちがえば、写真のはってある順序も各人各様である。

卓球部は、テーブルをひとつどこかで見つけてきて、これをもとの教官食堂に据えつけ、練習をはじめた。高林会計課長もしょっちゅうそこに顔を出して、学生の相手になったが、同課長にかなうものがいない。かれが特別ピンポンがうまかったというわけではない。勤労動員や軍隊生活に明け暮れた若ものたちには、これまで学生らしいスポーツを楽しみ、ワザをみがく余裕など、さらさらなかったということなのである。このため〝打倒高林〟が、ピンポンをやる学生たちの当面の目標となった。二十年の秋には、みんなの気勢をあげようというわけで、戦後初の運動会が開かれた。しかし、「ハラがへってはカケ足もできぬ」とあって、学校は早速、前記の払い下げトラックでサツマイモを買いつけ、学生たちにくばった。ラグビーは部ができたほかに、体操の下津屋教授の指導で、一般学生のあいだでもさかんに行なわれ、若ものたちは、軍服に軍靴といういでたちで、毎日ボールを追っかけまわした。なかには、将校用の長靴をはいて拍車をつけたままのものもおり、まことに物騒なラグビーだった。やがて二十一年になると、英語の沢崎九二三教授の呼びかけで、グリークラブも再建された。集まるもの、二十二回生五名、その年春入学した二十三回生三名だったが、しだいに参加者を増し、国大昇格後の二

十五年以降、全日本合唱コンクールで常時上位入賞の基盤ができていくのである。

これよりさき、昭和二十一年の春、二十一回生、二十二回生がそれぞれ三年生、二年生に進級しようとするときに、ひと騒動が持ちあがった。二年生になる二十二回生たちが、進級試験をやるという学校側に、不服をとなえはじめたのだ。今ならあたりまえのことだが、当時はそうではなかった。まず、二十年の四月から入学して学校にいた学生たちが、「オレたちはロクに勉強もできなかったのに、試験するというのはおかしい」とさわぎはじめた。かれらにいわせると、入学式もあったかどうだかわからない状況で、ほとんど授業も受けられないうちに勤労動員にかり出され、勉強らしい勉強もしていないので、なぜ試験をやらなければならないのか、ということになる。これに対して学校側が「君たちは一応、入学試験を受けて入ってきているから、まあ問題はない。しかし、復員組は試験らしい試験をやらずに採用しているから、学力の程度がわからない。それで試験をやる必要があるんだ」と答えたから、復員組のためにオレたちまで巻き添えとは余計おかしいじゃないか、ということになった。

演劇活動活発化す

復員組というのは、陸軍士官学校、海軍兵学校、陸軍および海軍経理学校、海軍機関学校からの転入組や、中等学校を出て海軍予備生徒や陸軍特別幹部候補生を志願していって、復員後編入されたもので、学校は二十年九月、こうした、いわゆる復員組八十四名の編入を認めた。しかしこの編入学は、中等学校時代の成績証明書、卒業証明書に、

連隊区司令部の証明とか、入隊した部隊の証明書があれば、あとは、口頭試問と身体検査だけで編入が決められた。つまり、学力試験はほとんど行なわれずに入ってきだわけだから、学校側のいうことも一理あるのだが、そうなると、こんどは、復員組としても黙っているわけにはいかなくなった。前記のI・Rもそうした復員組のひとりだった。Y校（横浜商業学校）を出て陸軍の船舶兵特別甲種幹部候補生になり、広島の部隊から帰ってきたものだが、そのI・Rは「ぼくらもちょっとカンにさわって、それなら長い人生で、一年ぐらい落第したっていいじゃないか。オレたちのためにほかの人まで試験、といわれたんじゃ迷惑だ。それなら、オレたちはいさぎよく原級に止まろうじゃないか、そういって、みんな講堂に集まって、ワァワァさわいだ記憶があります」と語っている。このさわぎで、こんどは学校のほうが驚いて、結局、みんな無試験で二年生に進級することになり、こゝは落着したのである。

戦争までの高商生は、毎年、中学出が約三分の二、商業出が三分の一と、出身もほぼ等質なら、年齢も一、二年ぐらいの浪人組がまじる程度で、ほぼ一様だったが、戦後の二十一回生から二十四回生あたりまでは、出身も年齢も、まことにバラエティに富んでいた。前記のI・Rが、二十一年の四月、すったもんだのあげく二年生に進級すると、一年下の二十三回生として、Y校では五年も先輩のH・Mが入学してきた。また、陸軍の船舶兵特別幹部生として広島で訓練を受けていた時分の教官が、やはり一年下で入ってくるといったぐあい。翌二十二年入学した二十四回生のK・Yは、海軍兵学校の途中で終戦になったので、中学の五年生にもどってから経専（高商）に入ってきたものだが、入ってみたらまるで復員軍人のクラス。K・Yはまだ十八歳だったが、クラスの平均年齢は二十一、二歳、ひとクラス約五十名のうち、旧制中学から直行したのは三割ぐらい、あとはみんな、ヒゲづらのおじちゃんばかりだった。

学校は「中等学校を出たばかりのものもいれば、二十五、六歳の旧陸軍少尉殿もおり、生徒が多様性に富んでいたことは、それ以前にも、以後にも例をみなかったことである。それでもみな向学心にもえて、平和な学園生活を取りもどしえた喜びをかみしめながら、清水ヶ丘への坂道を上り下りした。」K・Yと同期で、のちに国大経営学部の教授になるW・Aは、このように記している（『富丘会報』第二十六号、若杉明「私どもの学生時代」）。

こんな風にバラエティに富んだ学生たちが、昭和二十一年九月、復活した対高工野球定期戦に結集していくのである。

5　野球定期戦復活す

——占領下ハマの市街——

とにかくモノのない時代だった。そればかりでなく、戦時中からの約四年間、野球が敵性競技として禁止されていた空白は大きかった。野球部はできたが、メンバーのなかで中等学校時代に硬球のボールで野球を経験したことがあるものは、三人ぐらいしかいなかった。当時運動具店で売っていたグローブは、布製で、まん中だけ豚革の当てられたお粗末なもの。とても硬球には使えない。そこで、GI——アメリカ兵のこと——から、革製のグローブをわけてもらったりしたが、進駐軍物資の横流れに目を光らしていたMPがなかなかうるさく、かれらがやってくると、あわててグローブをかくさなければならなかった。

ボールもなかなか手に入らない。そこで、高商の先輩が、あの激しい空襲下に大切にしてしまっておいたウィニングボールをもらった。また、ベースボール好きのGIたちがよく富士見ヶ丘のグラウンドにもやってきたの

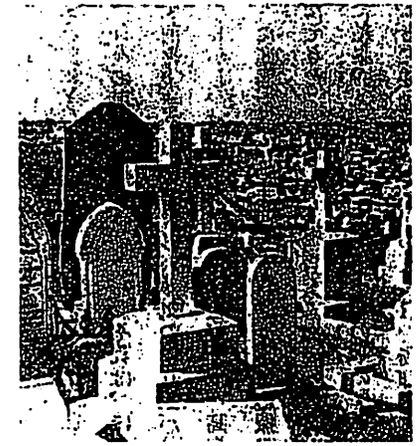
で、かれらと試合をやる。打球がファウルになって草むらにでも入ってしまうと、かれらは面倒くさがって探そうとしない。そこで、わざとファウルを打って草むらにボールをころがし、あとでそれを探し出して使ったりした。こんな風にして、ボール、バット、グローブは何とかまに合うようになったが、どうしてもスパイクがない。そんな折、高商七回生（昭和八年卒業）の野球部先輩M・Cが、大阪でスパイクが手に入るルートを探し出し、高工側にも話しかけて、高商、高工両チームのマネージャを大阪までつれていってくれた。両マネージャは、満員列車にゆられて往復し、リュックサックいっぱいのスパイクを買って帰ることができたのである。

野球定期戦の復活は、高商、高工とも、このように血のにじむような先輩たちの支援と激励があってはじめて、成しえたのであった。二十一年九月十九日の復活第一回戦をまえにした同月六日、高工時報（新聞）社では、両軍チームの主将や応援団長、副団長などによる座談会を開いたが、その席上司会者から「先輩の支援の程度は？」ときかれた高商チームのマネージャK・T（二十一回生）は、「われわれより先輩のほうが熱心ですよ」と答えているくらいだ（『横浜高工・横浜高商定期野球戦史』）。とくに十九回生K・S（のちに改姓してS・S）の熱意は選手たちの心を動かした。当時伊勢佐木町で書店を経営していたかれは、毎日リュックサックをかついで神田まで本の仕入れにでかけ、その帰りに富士見ヶ丘の坂を文字どおりかけあがってきては、選手たちにシートノックをつけた。その猛訓練ぶりは、選手たちのほうがおそれをなしたくらいで、たまに電車の都合で、かれがいつもの時間にあらわれないと、選手たちは、「きょうはKさんこないらしいなあ」と、喜び勇んで富士見ヶ丘の坂をおりかける。だが、途中でバッタリ、むこうからかけあがってくるK・Sにぶっつかる。そうすると、また重い足を引きずって、グラウンドに引き返したこともあった。後日勝利の栄冠を獲得するたびに、選手たちはK・Sに対する感謝の念でいっぱいになったが、練習当時は、かれの猛訓練にへきえきして、そんなこともあったのである。昭和十

七年に入学して野球部選手に登録されはしたものの、戦局の緊迫で翌十八年から定期戦中止、野球部は解散となって、ついに定期戦への出場の機会には恵まれなかったK・Sとしては、その夢を後輩たちに託して、情熱のかぎりをかれらの練習に注いだのであった。

こうして、高商チームは日に日にその技倆があがっていった。そして夏休み明けとともに、九月五日応援団が結団され、昼休みや放課後をつぶして、講堂で、あるいはプールサイドで、熱心な応援の練習が開始された。戦時中の中止以来四年間の空白があったが、応援歌のかずかずは、さいわい寮生活の経験のある三年生たちが、先輩から口伝えにうたい継いでいた。それでもわからないところは、リーダーの学生が先輩たちに教わりに走った。「それはまったく熱烈というにふさわしいものでした。全学ひとりの脱落者もいなかったくらいです。拍手や人文字、そして、チャンスにリーダーが踊る高商音頭も、日一日と上達していきました。まるで熱にうかされたような毎日でした。」二十二回生のK・Hはこのように記している（前掲『定期野球戦史』、高商昭和二十三年卒・倉敷宏「その胸にYCC――ブラスバンドの思い出――」）。それは、戦前の高商生たちが、毎年のほぼ前半を野球定期戦にかけた日々の再現であった。いや、それは、ほかには何ひとつ娯楽らしいものもない戦後の廃墟のなかにあっては、戦前を上まわるすさまじい熱気の盛り上がりであった。

しかし、ブラスバンドが問題だった。高商は楽器のすべてを戦災で失っていたからである。「高工は無キズだった楽器を持ち出し、ブラバンつきで応援の練習をやっている。」「いや、ブラバンを先頭に行進の練習もはじめたそうだ。」そういう情報がつぎつぎと入ってきた。もはや一刻の猶予もならない。学生たちは八方手をつくした結果、とうとう、富士見ヶ丘の下のY専（横浜市立商業専門学校・いまの横浜市立大学）とY校から、楽器を借りることに成功した。前記のK・Hを指揮者にブラバンの編成がはじまった。そこはよくしたもので「ぼくはトラン



外人墓地から街を望む

ペットが吹ける」「オレはクラリネットなら少し……」というぐあいで、十数名のブラバン員はたちまち満席になった。復員学生はさすがにラッパがうまかった。こうして、練習が急ピッチで進む。応援歌の伴奏はわりあいラクにできたが、市中行進やスタンド着席のときなどに演奏する行進曲が難物だった。高商が伝統的に使ってきた行進曲は「勝利の父」であることが、ある日練習を見にきた先輩から知らされた。そこで、その楽譜を入手して練習してみたが、そのむずかしいことといったら、お話にならない。これではとても、あと幾日もない定期戦当日までに、全曲をマスターすることは不可能とわかったので、みんなで相談の結果、同曲の三分の一ぐらいをきれいにやって、残りは時間的に割愛した風に見せかけることにした（前掲『定期野球戦史』、倉敷宏手記による）。このときから十年ほどまえにも似たような状況があった。昭和十二年春、前年まで定期戦のたびに、市内の神社やお寺から大太鼓、小太鼓を借り集めては、高工側の優秀なブラバンに対抗してきた高商は、はじめてブラバンを持ち、一カ月前後の練習期間で定期戦に臨み、見事な演奏をやってのけたのであった。

戦後復活第一回定期戦の会場は、「ルー・ゲーリック球場」であった。それは、大震災後の復旧成って昭和四年開場し、同六年以来、高商・高工野球定期戦の舞台となってきた「横浜公園球場」の、米軍占領下の名前であった。両校の卒業生たちにとって思い出深いこの球場は、戦争中には俘虜収容所として軍に徴用され、いくたびか焼夷弾の雨を降らされたものだったが、戦後も、すぐには市民の手にもどらず、米軍用の球場として召し上げら

れていたのである。さすがはベースボールの本場の国からきただけあって、この球場には、色とりどりのユニホームをつけたGIやその家族たちが、毎日のようにジープやトラックでやってきては、ゲームを楽しんでいた。

空襲で焼けたあとのハマの市街全体に、米軍の街が出現していたといってもよい。桜木町の駅に降りると、駅前を尾上町方面につなぐ大江橋の先から、進駐軍の兵舎が目にとまり、山下公園から本牧まで、その関係施設でいっぱいだった。かつてハマの市民の憩いの場であり、戦前の学生たちの散歩コースでもあった山下公園は、太い金あみにかこまれ、進駐軍家族の住宅地にかわってしまっていた。その昔敬派の学生が出没した本牧のチャブ屋街も、同様進駐軍の住宅となり、それは遠く間門のほうまでつづいている。根岸の埋立地もすっかり占領され、昭和初年、高商対高工の野球定期戦会場となって、若ものたちが血をわかした滝頭球場のあったあたりも、米軍の飛行場になっていた。一方市の中心部に出てみると、伊勢佐木町は通りの北側、日ノ出町から黄金町にいたるあいだに、進駐軍のカマボコ兵舎が立ちならび、簡易飛行場がつくられていて、セスナ機やヘリコプターがたえず離着陸していた（前掲『定期野球戦史』による）。

野沢屋（現ノザワ松坂屋）は接収されて米軍の病院になっており、伊勢佐木町の東のはずれにあった高島屋は、そのPXになっていた。そんな風で、横浜は昭和二十三年ごろまで、非常にさびしい街であった。その年、高商に入学した二十五回生のN・Sは、「入学した当座、伊勢佐木町もさびしい限りだったが、在学中の三年間に、街は急速に復興した。ただ、進駐軍の兵隊が大手を振って歩いていたのが、強く印象に残っている」と語っている。当時〝パンパン〟と呼ばれた街の女性と、ウデを組んで歩いているGIが多かった。そして、警察が時おりトラックを走らせては〝パンパン狩り〟をやった。それらしい女性を見つけると、有無をいわさずトラックに放り込んで、性病の検診を強制したのである。なかには普通の女性がまちがえて連れていかれ、恥辱を受けるとい

う悲劇も起こった。占領下とはいえ、人権じゅうりんもはなはだしいパンパン狩りではあったが、そんなとき、N・Sら学生が高ゲタを鳴らして歩いていると、街の女性がすっと近よってきてウデを組む。アベックだとつかまらずにすんだからだ。そんなことで、ウデをつかまれて歩かされたことが時どきあったとN・Sは語っている。

市民は食糧難にあえぎ、近在への買い出しに狂奔していた。「ハラがへってはいくさができぬ」のたとえ、選手たちも食いものの不足がいちばんこたえた。二十一年九月六日商工時報社主催の高商、高工両軍座談会（前掲『定期野球戦史』）によると、両校野球チームの予算は、高商が二千五百円（いまのカネで約五万六千円）、高工が千五百円（同じく約三万五千円）だったが、それだけではとても足りず、高商チームの主将Y・T（二十一回生）は司会者の質問に答えて「各部の余剰資金を適当にまわしてもらっており、食糧等は生徒の寄付をまっておりますが、一本のイモでも非常にうれしく思います」と述べている。街の食堂などで買えたものは〝海宝めん〟ぐらいで、これは、ヒジキのばけものみたいなものを、アミノ酸ショウ油のにおいを我慢しながら食べる代用食だった。そこで、前記のように「豚眠寮」に合宿していた野球部のもとへ、応援団の学生たちが、それぞれ、ひと握りのウドン粉、一本のサツマイモを持ち寄り、選手たちはそれによって、猛練習のあとの空腹をかろうじていやす毎日だったのである。

このようにして復活第一回戦の九月十九日がやってきた。戦前から通算して十七回目の定期戦である。両校の応援団は、市中の行進、ゲーリック球場への着席競争、エールの交換……と、万事、戦前からの仕きたりに従ってことをはこんだ。それは、暗い戦争の年月を経て、戦後なお耐乏生活とたたかいながら、復活第一回定期戦を開くまでにこぎつけた学生たちの〝古きよき時代〟へのやみがたい郷愁の表現でもあったにちがいない。前回負

けたほうが挑戦状を送り、市中も先きに行進するというのが戦前からの仕きたりだったので、昭和十七年戦時下最後の定期戦に敗れた高工側が、まず市中を進んだ。「高工はすでに伊勢佐木町に向かった」という〝斥候〟役の学生の報告をきいて、高商応援団は、校旗を先頭に、応援団旗、ブラスバンドとつづいて、富士見ヶ丘をおりていった。戦争の被害と〝竹の子〟生活に打ちひしゃがれたハマの市民たちにとっても、定期戦の復活は最大級の明るいニュースだった。伊勢佐木町通りを行進する高商応援団の頭上には、ファンたちのまき散らす色とりどりのテープや紙吹雪が、霏々として舞っている。そして学生たちの歩んでいく先き先きには、数刻まえ、高工生たちのためにまかれたテープや紙片が、一面に散り敷かれていた。

「相対戦する両校の全員が行進する、そして街はふた手にわかれて応援する――こんな壮観らしい光景がまたとあるでしょうか。私は熱い涙がこみ上げてくるのをどうしようもありませんでした。」二十二回生K・Hはこのように記している（前掲『定期野球戦史』、倉敷宏手記）。

球場入口に到着すると、両校応援団が定刻を合図に、ナダレを打ってそれぞれの側のスタンドに突入、着席競争をするのも、仕きたりどおりだった。それからエールの交換、試合開始となったが、熱戦のすえ、5対5で日没引き分けとなった。進駐軍が球場を使用するため、試合はこの一回しかできなかった。球場へ入るさいも内野の入口は使用を認められず、外野席との通路から入らなければならなかった。また、エールの交換で高商は戦時中まで、応援団長が「ハイザー横浜高等工業学校！　ハイザー高工、ハイザー高工、フレー、フレー、フレー！　ノッホアインマール、ハイザー高工、ハイザー高工……」と、ドイツ語でかけ声をかけていたのを、〝敵性国語〟はまかりならぬと禁じられ、徹頭徹尾、フレー高工、フレー高工でやらされたことなど、占領下の制約はいろいろとあった。しかし、ともかくも〝浜の早慶戦〟として戦前市民の血をわかした、野球定期戦の伝統を回復する

第19回・最後の定期戦

ことができた。練習不足を心配したブラバンも、予想以上の名演奏ぶりだった。

やがて暮れなずむ富士見ヶ丘原頭に帰りついた高商応援団は、選手をかこんでスクラムを組み、来年への誓いをあらたにした。戦前の仕きたりでは、ここで祝いの酒ダルが抜かれなければならないところだが、当時はもちろんそんなものは手に入らない。そこでサツマイモがみんなに配られた。この日を期して、前記科学研究部の払い下げトラックが近郷近在を走りまわり、二十一回生の総務委員長Y・Mらが上乗りをやって、買い集めておいたものである。サツマイモでストームというのも、高商の歴史にとって空前絶後のことであった。「ジャズもエレキもボーリングも、深夜喫茶もカーもなかった時代の青春とは、こういうものでした。私たちは、これあるがために母校への限りない愛情を深めていったと思います。（中略）私たちは血をたぎらせて熱狂しました。（中略）声を限りにうたい、叫び、笑い合う青春

の群像。私たちのはるかな先輩たちにより創始され、そして年ごとに受け継がれてきた定期戦こそは、私たちの青春そのものだったのです。」（前掲『定期野球戦史』、倉数宏手記）

こうして野球定期戦は、翌二十二年と、大学昇格前の二十三年までつづけられた。戦前から通算すると十九回、この両年度とも高商が勝ち、高商は十一勝七敗、一引き分けの戦績をおさめている。この間二十二年には、後年東京ガスに入社して都市対抗野球などでその人ありと知られた、二十四回生の本田有隆投手らが入学してきて、選手も充実、技術水準も高くなり、二十三年十月行なわれた最後の全国実業専門学校野球大会に優勝した。全国的な戦績も戦前なみに到達したところで、大学昇格を迎えることになったわけである。

公園球場はいぜん、ゲーリック球場として進駐軍の接収がつづいていたため、二十二年の定期戦では、高商ESS（イングリッシュ・スピーキング・ソサイエティ）の連中が日ごろのうんちくを傾けて、進駐軍当局から三回戦（三日間）までの球場使用許可と、応援団の市中行進のOKも取りつけてくれた。そこで定期戦当日の第一日目、高商軍は例によって、校旗、応援団旗を先頭にリーダーが手にした赤い旗を打ち振り、応援歌、行進歌をうたいながら富士見ヶ丘をくだり、市中を行進したが、それを見た進駐軍の第八軍司令官アイケルバーガー中将が「労働組合のデモみたいだ」とびっくり仰天、第二日目からは市中行進が禁止されてしまった。最終回の二十三年のときも同様で、応援団は横浜公園に集まって球場に入った。しかし、二十二、三年とも勝利の栄冠をかちえた高商軍は、勝利決定の日、富士見ヶ丘の夜空に赤々と燃えあがるカガリ火をかこんで、夜のふけるまでファイア・ストームに青春を謳歌したのであった。

6　大学昇格への胎動

——アルバイト時代はじまる——

学生たちが以上のように、米軍占領下の、欠乏時代のキャンパス・ライフを送っているあいだに、戦後の学制改革はまっしぐらに進められていた。いわゆる六・三・三・四制への移行は、昭和二十二年三月末、教育基本法および学校教育法の公布で、その骨格ができあがり、新制度は二十二年度中に新制中学まで実施され、引きつづき高校、大学に移行するはこびになっていた。このため文部省は二十三年一月十五日、同省に「大学設置委員会」を設け、新制大学設置の手続きを具体化した。従来大学の設立は、文部大臣だけの認可で行なわれてきたが、新制大学では、この大学設置委員会によって設立申請が審査され、その答申があってはじめて、文部大臣が認可できることに改められたのである。同委員会の委員長は東京工大の和田小六学長で、常任委員に経専（高商）の糸魚川祐三郎校長が選任された。工専（高工）の冨山保校長もその委員に入った。

これに前後して、横浜の各専門学校で大学昇格への準備活動が開始されていた。経専（高商）では、すでに二十二年の二月に、校内に大学昇格準備委員会を設けていたが、同年の秋には、学校幹部、教職員、学友会、富丘会、および父兄会の五者から成る「横浜経済専門学校大学昇格期成連盟」が結成され、糸魚川校長を委員長として、十一月二十日正式に発足した。高工でもこれと前後して、二十二年八月、校内に大学設立準備委員会を設け、さらに、翌二十三年五月には同窓会の横浜工業会が大学昇格後援会を結成、そのころは「横浜工業大学」（仮称）という、高工だけによる単科大学の設立をめざしていた。これに対して、高商も当初は単独昇格案、その後、いく

つかの専門学校による連合大学ないしは複合大学の場合をも想定する態度にかわっていった。いずれにしても、大学昇格のために何よりも心配されたのは、図書館の図書の不足であった。このため、前記の大学昇格期成連盟も、目的（大学昇格）達成のための事業の柱として「図書館充実の促進」を掲げて出発したのである。富丘会（卒業生）、父兄などから図書充実のため総額百万円（いまのカネで約一千万円）の募金活動が、こうして開始された。

同連盟に二名の委員を出した学友会も、学生および父兄からの資金カンパに、積極的に起ちあがった。前記のとおり学友会はすでに学生の完全な自治組織になっていたから、これは、母校の将来に期待をかけた学生たちの発意にもとづくものといっていいだろう。二十二年十二月十五日付の『横浜高商新聞』百五十五号は——後記のように新聞は同年二月から復刊していた——一面トップで、前記期成連盟の発足を報じたあと、「学生起つ」という見出しで、次のように記している。

「かくの如く大学昇格問題につき学校当局、富丘会もひと方ならぬ配慮、運動をされているが、今回学生の手に突如、父兄宛に資金募集の通知を受け、家庭の経済的窮状を知るわれわれ学生は、自校昇格と家庭経済のなかにはさまれ、われわれのこの手で是非ともこの資金をと、決然起ちあがり、日々アルバイトへいくものが増加している。学生宛資金募集内容は、現金一人一口三百円、平均千円ずつである。なお、これを機会に学校との連絡のため、父兄会が結成された。」

また、同じ紙面で、新聞部が行なった学生の世論調査の結果が発表されているが、そのなかの「大学昇格」の項目では次のとおり、単独昇格希望が圧倒的な割合を占めていた。

	〔単独案〕	〔総合案〕	〔保留〕
一年生	八七%	四%	九%

二年生　八〇％　九％　一一％
三年生　七二％　一五％　一三％

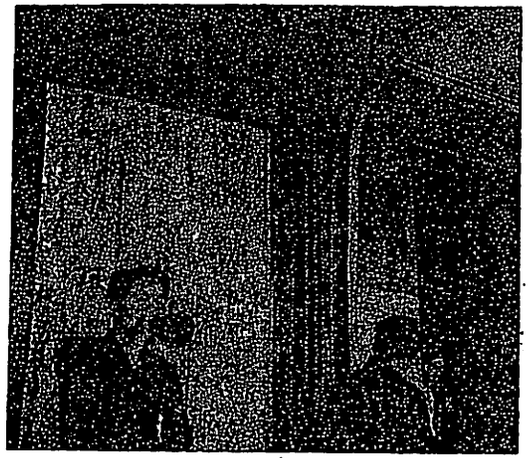
学生一人平均千円というと、いまのカネに換算して約一万円。カンパとしてはけっして小さな額ではない。いずこの家庭も、終戦直後の食糧難と悪性インフレに悩まされていた当時のこと、学生たちは自分たちのアルバイトによって、この資金をかせぎ出そうとしていたのである。「冬休みになるまえに父兄にも頼んで、オヤジ、ひとつ奮発してくれよ、とある程度出してもらったのですけれども、オレたちも、休み中にアルバイトしたり、ソバを食うのを一ぺん我慢したりして、カネをつくりました。そして休みが明けて（二十三年の一月）学校へ出てきたときに、十円でも二十円でもいい、オレたちの気持ちで、百万円の寄付に協力しようじゃないかと、ぼくは各クラスに頼みにいきました。そしたら、結構まとまった額が集まりました。」期成連盟の学生側の中心のひとりだった二十二回生I・Rは、このように回顧している。

学生アルバイトの一般化というか、学生アルバイト時代の到来とでもいうべきか、学生の経済生活は、戦前とはちがったパターンのものになろうとしていた。戦前は、学生といえば学資を全面的に家から送ってもらう、いわゆる〝親のスネかじり〟が普通で、学資の全部または一部を自分でかせぎ出す「苦学生」――今日の言葉でいうアルバイト学生は、むしろごく少数だった。そういう意味では「古きよき時代」であった。ところが戦後の食糧難、物不足と悪性インフレは、日本中の家庭に打撃を与え、学生たちは、親のスネをかじるだけではとうていやっていけなかった。前記昭和二十二年十二月十五日付の『横浜商新聞』は、次のように記している。

「本校学生の内職状況を見ると、調査人員二三二名中四七名が内職をしているほか、日々、時に応じてアルバイトにいくものも多数おるのみならず、調査当日居あわせなかった大部分のものも、内職者と推定される。概

して長期内職より短期内職を行なっているものが多く、そのため学生の登校も日により差異があり、出席率は良好とはいえない。」

アルバイトの〝業種〟は、進駐軍関係、運転手、宝くじの販売、ソロバン教師、その他肉体労働があげられ、その報酬は、長期アルバイトを除き、週平均三回程度の就業で、月にだいたい四、五百円。いまの貨幣価値に直して五千円内外と、ずいぶん低賃金だったわけである。夏休みなどはみんなアルバイトにいった。二十四回生のK・Yは、洗たく屋にアルバイトにいき、進駐軍将兵のシーツ、シャツとか、かれらのおかみさんのパジャマとかを洗う仕事をやった。おカネもほしかったが、三食銀シャリ（白米めし）つきが魅力で、農家にもアルバイトにいった。二、三週間取り入れの手伝いなどをやって、もちろん何がしかの謝礼ももらうが、とにかくその間は、自分の家のほうの食糧がそれだけ助かることが大きかった。そういう時代だったのである。



学生運動の呼びかけ

二十二年の十月には、東京地方裁判所の山口判事が配給生活を死守して栄養失調死する事件が起こった。それは、国民が政府の統制価格や食糧配給によっては、生きることができず、東京や横浜など大都市の焼け跡に群生したヤミ市場が、人びとの生命と生活を維持するための、不可欠の存在になっていたことを、死をもって実証したものであった。翌二十三年四月には、全官公庁労組の賃上げ争議が、二九二〇円の給与ベースで妥結、

そのころの給料生活者の収入水準をあらわしている。学生アルバイト時代のいきつくところ、ヤミ金融会社をつくって社長におさまる学生まであらわれ、そうしたヤミ金融会社「光クラブ」が二十四年十一月に倒産、学生社長は自殺するさわぎも起こった。

経専（高商）の授業料も、戦時中の年額八十円が、二十一年には二百四十円に、二十二年に四百円、二十三年からは千二百円へと、ウナギのぼりになっていったが、その他学生の身のまわりの商品やサービス価格のインフレートぶりと水準を、昭和二十二年についてみると次のようになる（加藤秀俊ほか著『追補明治大正昭和世相史』による。ただし、誤植と思われる数字は訂正）。

▽（酒）清酒一級＝2月四三円、4月一一九円、8月一三二円。▽（ビール）2月七円、4月二〇円、8月二三円。▽（タバコ）ピース＝4月三円、11月五円、金鵄＝4月二・五円。▽（銭湯）大人＝3月一・三円、7月二円、10月四円。▽（映画）封切館＝3月一〇円、8月二〇円。二番館＝3月五円、8月一〇円。▽（国鉄運賃）東京―大阪三等（いまの二等）＝3月四五円、7月一五五円。▽（新聞）月決め＝5月一二・五円、10月二〇円。▽（郵便）各4月、封書一・二円、ハガキ五〇銭、速達四円。▽（米）内地産精米小売値各10キロ＝7月九九・七円、11月一四九・六円。

前記の『横浜高商新聞』百五十五号は、「いままでの如き特権階級的な学生生活は、まったくその姿を消し、いまや働きつつ学ぶという観念が学生間に高まり、また、そうすることを余儀なくされている。（中略）かくの如き現状にある学生に対して、当局側は学生の真摯なる気持を諒とせられ、出席うんぬんに対しては、なお一考せられんことを切望する次第である」と訴えている。高商創設期の大正末年、一回生たちが、出席日数の不足で進級試験の受験停止を食った苦学生の級友二名を救わんものとスト寸前まで学校当局に食いさがった、あの「三・

一会事件」を思い起こす人もあるだろう。しかし、戦後のアルバイトは二、三名の問題ではなかった。むしろ、全学生の問題だったといえよう。戦後学生の自治組織として再建された学友会の初代総務委員長となった二十一回生Y・Mが、「私らのころの学友会は、その後の学生自治会のようなイデオロギー性をまったく持っていなかったが、授業の出席をとるのをやめてもらおうと要求して、学校当局と集団団交のようなことをやったことがある」と語っているのは、以上のような戦後学生の経済状態からきた、切実な要求だったわけである。高商二十四回・大学一回生のW・Aも、「このような学生の経済的窮状を学校側がしんしゃくしてか、当時は落第者はほとんど出なかった」と記している（『富丘会報』第二十六号、若杉明「私どもの学生時代」）。

大学昇格・図書充実のための募金活動が行なわれたのは、そうした時であった。学生ひとり一口三百円の寄付の重みが、学生たちにとってどれほど大きなものであったかがわかるだろう。しかし、学生たちはあるいは冬休みにアルバイトに出かけ、あるいは一ぱいのソバを我慢して募金に応じた。こうしてまとまった金額を、二十二回生I・Rらの学生代表が期成連盟の会長である糸魚川校長のところに持っていった。校長室で、たまたま来訪中の他の専門学校の校長と会っていた糸魚川校長は、「こづかいも足りないのに、こんなにしてもらって……」といって、このカネを受け取ったが、その両の目には涙がいっぱいに浮かんでいた。同校長はお客の他校校長にも、「うちの学生はこんなに一生懸命やってくれてるんですよ」と、うれしそうに話しかけていたという。

教職員も全国を行脚して卒業生の寄付を呼びかけた。徳増栄太郎、伊東弥、下津屋俊夫の各教授や、高林藝雄会計課長らが、富丘会の地方支部総会が開かれる機会をとらえて、きょうは北陸地方に、あすは静岡へととびまわり、卒業生たちに、母校大学昇格のため図書の充実の必要を訴えたのであった。北陸地方には、二十一年の秋、伊東、下津屋両教授と高林会計課長が出かけて、新潟、福井の富丘会支部結成会にそれぞれ出席したが、そのと

きの模様を、高林会計課長はつぎのように記している。

「新潟では、『図書館充実のために教職員は何をしているか』と一卒業生からの質問があったが、小学校教員に劣るわれわれ教職員の物的待遇の低さを、率直に数字を挙げて説明し、その惨たる生活苦のなかからも、たとえ五冊、十冊でも書籍を持ち寄る企てのあることを伝えたときには、満座粛然として、深い同情といたわりの思いを寄せてくれたのであった。」（前掲『横浜高商新聞』第百五十五号、「富丘会便り」）

このようにして、教職員、学生、卒業生一体の協力により、図書充実費百万円の募金は達成された。今日、国大の学生たちが図書館で手にする図書のなかには、以上のように、当時こぞって貧者の一灯を寄せた教職員や先輩たちの、母校昇格に対する血のにじむようなねがいがこめられているのである。

7　戦後民主化へ進む学園

——学生自治会の台頭——

敗戦とともに、連合軍総司令部（GHQ）によって旧秩序の基礎をゆるがす措置がつぎつぎと打ち出され、戦後民主化の運動は、日本列島をおおって怒濤のごとく展開されていった。昭和二十年十月、大正の末期以来日本の大衆運動を抑圧しつづけてきた治安維持法が撤廃され、この法律によってとらわれていた徳田球一、志賀義雄らの共産主義者が十八年ぶりに出獄し、同時に政治犯五百人が釈放された。共産党はただちに、「天皇制打倒、人民政府樹立」をかかげて公然たる活動を開始し、また、同年十一月には、戦前の社会大衆党を中心に、社会民主主義の統一政党として日本社会党が結成された。一方、既成政党の側では、同じ月に、大政翼賛会所属代議士

を中心に進歩党が、また鳩山一郎ら翼賛会の非推せん議員を中心に日本自由党が結成された。この間GHQは、同年十月日本政府（敗戦時の東久邇内閣から幣原内閣にかわっていた）に対し、婦人の解放、労働組合の助長、教育の自由主義化、専制政治からの解放、経済の民主化を要求する五項目の指令を発し、この指令にもとづいて、財閥解体、天皇の資産凍結、農地改革、神道と国家との分離、修身・歴史・地理教科書の改訂などが、つぎつぎと具体化されていったのである。他方、同年九月、東条英機ら三十八名が戦争犯罪人として逮捕されたのを皮切りに、戦犯逮捕の指令があいついで出され、翌二十一年一月一日には、天皇の人間宣言が行なわれ、同月、軍国主義指導者の公職追放が開始された。また、二十一年十一月三日、「日本国憲法」が公布されて、新しい日本の基盤が打ち立てられた（遠山茂樹ほか著『昭和史』による）。

富士見ヶ丘の学園でも、前記のように二十年十月学校報国団が解散され、学友会が学生の自治組織として再出発したが、二十一年二月正式に再開された授業の内容にも、戦後解放の波がとうとうと打ち寄せてきた。二十回生たちが前年の八月、学校側からおがみ倒されて卒業していったあと、二年生で最上級になっていた二十一回生たちに対し、徳増栄太郎教授は、「君たちは経済学を何もやっていないから……」といって、経済史の授業時間を割き、マルクスの労働価値説や、レーニンの帝国主義論を情熱をこめて講義してくれた。戦時中、「ここはノートしないように」と、軍部や文部官僚の目をはばかってきた同教授にとって、学問の自由がいっきょに花開いた感じであった。二十一回生たちが三年生になった二十一年の四月からは、ゼミナールが復活し、第二外国語の授業もはじまった。渡辺輝一教授の経済政策や社会学、森田優三教授の統計学、黒沢清教授の会計・経営学、沼田嘉穂教授の原価計算、井手文雄教授の財政学や工業経済学、河野五郎教授の商品学などの講義が、せきを切ったようにいっせいにスタートした。越村信三郎教授はすでに、『日本評論』（のちの『経済評論』）誌上に、「図解資

本論」を連載していた。

教官のなかでも博学多識をもって鳴る渡辺教授の講義は、戦前から脱線につぐ脱線が有名で、口の悪い学生たちから〝永遠の序論〟というニックネームを奉られていたが、戦後もその調子はかわらず、横道にそれた話がいつのまにか本論になったりして、翌週の講義まではもとのところにもどらないということもしばしばだった。学外からも、慶応大学の峯村光郎、東大からは、のちに昭和四十年代東大紛争時の総長となる加藤一郎などの諸教官が、講師として法律の講義にやってきた。また、英語の沢崎九二三教授がテキストに選んだゴールズワージーの、"On silver wedding day…" にはじまる「アップル・ツリー」は、二十一回U・Aたちの、若い心を甘くゆさぶった。やがて、戦時下の青春時代を富士見ヶ丘で送った十五回生の宮崎義一、十六回生の長洲一二の、若い両教官も赴任してきた。

二十一年の八月には、「国家主義的授業科目を廃止し、修業年限を三年にもどして、男女共学を認める」趣旨の学校規則改正が、四月にさかのぼって施行され、二十二年の二月からは学校新聞が、学生のイニシアティブで発行されることを明確化して、『横浜高商新聞』と改題して復刊された。はじめはタブロイド版だったが、同年秋発行の第百五十四号からは、いまの新聞大になった。しかし急進するインフレで経費が高騰し、この紙型拡大のころ、新聞定価は一部二円五十銭なのにコストは三円八十銭かかり、新聞部員の学生たちは広告集めや、校外での新聞売りさばきに奔走しなければならなかった。サークル活動には、のちに社研（社会科学研究会）に発展する唯物論研究会も生まれた。暗い戦争の時代からの解放で、歴史の歯車は急激に左旋回をはじめたのである。かつては職業軍人を志した陸軍士官学校や海軍兵学校など、軍関係学校からの転入生が、左翼的な民主化運動のアクティブになる例が目立った。戦争中かれらの精神的支柱となった価値観が、敗戦によって根底から崩壊し去り、

その反動として、若いかれらは新しい思想的価値を、貪欲に、性急に希求していたのであろう。

黒沢教授のところには、そういうアクティブ連中がよく議論しにやってきた。

「天皇制は廃止すべきだと思いますが、どうお考えですか？」

「いや、いままでのように超国家主義と結びついたあり方がいけないので、今後は、国民の尊崇の対象というだけの、〝象徴的存在〟として存続すべきだ。」

そういったやりとりが行なわれた。議論は平行線をたどったが、学生たちは礼儀正しく、師を師としてうやまい、先生の側の意見もよくきき、昭和四十年代の活動家たちのように先生をつるし上げるというようなことは絶対になかった。教官も学生も過配、欠配つづきの米の配給と悪性インフレ下の〝タケノコ〟生活に苦しみ、「同じカマのめし」ならぬ「同じ飯ごうのイモ」を食べる仲だったのである。家から白米の弁当を持ってくるなんていうことはとてもできなかったから、教職員も飯ごうなどを学校に持ちこみ、戦時中以来、校庭の片隅十坪ほどの畑で作ってきたサツマイモをとってきては、昼食に雑すいを作ったりしていた。昼休みにそれを学生といっしょに食べ、ひとときを語らいに過ごすこともしばしばだったから、教官と学生とのコミュニケーションは、きわめて密接だったのである。黒沢教授は、のちにそのように述懐している。経済的にははるかに豊かになった昭和四十年代前後にいたって、このような学園の〝心〟が、荒廃し去ったのは何ゆえであったろうか。

そのころ、経専（高商）にも教職員組合が結成され、黒沢教授が初代委員長に推された。副委員長は高林会計課長。組合結成にまでこぎつけた縁の下の力持ちは、〝エノケン〟こと渦川真蔵書記であった。やがて二十一年末ごろ、全国の官公庁労働者二百五十万人を中心に、産別系民間労組も加わって全国労組共同闘争委員会が組織され、二十二年二月一日を期した労働者のゼネ・スト――いわゆる二・一ストへの態勢が盛り上げられていく。そ

して、経専教職組の高林副委員長も、二・一スト前夜は、紅葉坂近辺のビルの一室に監置された神奈川県教職員組合の本部に、連日のように詰めかけていた。日本の歴史上空前のストライキになるはずだったこの二・一ストは、その寸前で占領軍命令により禁止され、不発におわったが、高林会計課長は、学校の大学昇格後も数年間は教職員組合の副委員長をつづけ、組合幹部と学校当局者の一人二役を演じていた。組合の問題といっても、ほとんど、事務局長や学長を通じて文部省に要求することばかりで、学校内で対立するようなことは何もない。団交でたまたま予算の話になると、「それじゃ、こんどはぼくはこっちにすわらなけりゃ」といって、学長や事務局長側の席に移り、副委員長変じて会計課長として、予算の説明をしたりした、と高林課長は後日語っている。組合といってもイデオロギー性をほとんど持たない、牧歌的時代だったわけである。

二十二年の十一月には、秋晴れに恵まれた十四、十五、十六の三日間、学生祭が盛大に催された。第一日は、午前中学生弁論大会をやったあと、午後は黒沢教授の講演に引きつづいて、「社会主義経済か資本主義経済か」というテーマの討論会。黒沢、井手、宮崎、三宅、長洲の諸教官をかこんで座談会形式で行なわれ、唯研（唯物論研究会）のやかましい連中がつぎつぎと立ちあがって、質問の矢を放てば、諸教官はこれを受けて堂々とその意見を披瀝し、議論はしばしば白熱化するうちに、二時間にわたる討論会をおわった。戦前では考えられもしなかったテーマの討論であり、時代はかわったのである。第二日は運動会。クラス対抗種目の優勝は二年A組が獲得。そのほか、ゼミ対抗のムカデ競争、職員のタバコ喫い競争、師弟競争、高商生独特のソロバン計算競争などが、笑いのウズを巻き起こした。「なかでも人生競争は人気を呼び、生まれてから死にいたるまでの人生を、赤ん坊より小学生、中学生、高商生、サラリーマン、新婚旅行、子宝時代、老年期、昇天とにわけて、それぞれ未来のワイフを連れ、走りまわる姿は、まさに当日の圧巻であった。」（前掲『横浜高商新聞』第百五十五号）第三日は

芸能祭。高商伝統の外語（英語）劇をまじえて、数本の演劇が上演され、せまりくる夕やみとともに、三日間にわたる学生祭の幕が閉じられた。

このころ富士見ヶ丘に学んだ若ものたちは、何を考え、精神的に何を求めていたであろうか？　新聞部が二十二年十月行なった学生の世論調査が、これを知る手がかりを与えている。前掲『横浜高商新聞』第百五十五号に掲載されたその結果は、次のとおり、学生たちの強いマルキシズムへの志向と、日本共産党への期待を示している。たしかに時代はかわっていた（大学昇格問題の調査結果は前掲）。

▽読書傾向――学術書では、『共産党宣言』、『資本論』、『ドイッチェ・イデオロギー』、『国家と革命』等は動かぬところ。河合栄治郎『社会政策原理』『学生に与う』、峯村光郎『法律学序説』にも読者が多い。

▽一般書のベストテンは①尾崎秀実『愛情は降る星の如く』、②河上肇『自叙伝』、③倉田百三『愛と認識との出発』、④島木健作『生活の探求』、⑤倉田百三『出家とその弟子』、⑥トルストイ『復活』、⑦トレーズ『人民の子』、⑧中野重治『詩集』、⑨小林多喜二『蟹工船』、⑩谷崎潤一郎『細雪』

▽政党観

（支持する政党）

	（社会）	（共産）	（自由）	（民主）
全学年	二九％	一三％	一三％	一％

学年別の内訳は、一年、二年生の社会党支持それぞれ三一％、自由党は一六％および二〇％、三年生の支持政党は共産党が三六％でトップに躍り出、自由党はわずか三％。

（特に排斥する政党）

	〔共産〕	〔自由〕	〔社会〕	〔民主〕	〔国協〕
一年生	三三%	一六%	七%	二%	二%
二年生	二四%	七%	三%	一%	一%
三年生	五%	二五%	一三%	一三%	一〇%

ここでも高学年になるに従って共産党アレルギーは薄らぎ、反対に自由党などの保守勢力および社会党に対する批判が強まっている。

▽世界観――（一年生）ヒューマニズム一七%、理想主義一五%、マルキシズム一二%、自由主義一一%、その他三三%。

（二年生）ヒューマニズム一五%、マルキシズム、社会民主主義各九%、自由主義七%、その他五一%。

（三年生）マルキシズム二八%、合理主義一二%、社会民主主義一〇%、理想主義五%、その他三二%。

以上の新聞部の世論調査は、調査対象学生数、回答率、パーセンテージの出し方など、不明の点が多いが、一応、当時の学生活動分子が、急速に左旋回をはじめていたことを物語るものということができよう。

こうした学生たちの思想的動向を背景として、学友会はしだいに政治的な傾向を持って、実質上自治会の形態に転化していき（それが正式に学生自治会の組織となるのは、後述のように、大学昇格直前の二十四年春ごろからである）、二十三年二月二十六日には、教育復興をスローガンに、他の官立大学高専校の自治会に同調して、初の学生スト

授業料値上げ反対署名運動

（同盟休校）を行なうにいたる。そして同年六月二十三日には、授業料値上げに反対して二度目のストが決行された。全国で行なわれたこの授業料値上げ反対闘争が、全学連結成への導火線となった。

同年三月ごろ、文部省が専門学校の授業料を四百円から千二百円に、大学は六百円から千八百円（いずれも年額）に値上げしようとしている動きを、前年十一月に結成されたばかりの全国国立大学学生自治会連盟（国学連）のリーダーたちがかぎつけ、全国の大学高専校に呼びかけて、反対運動の輪を広げていった。中心になったのは、当時日本共産党の細胞が一大勢力を擁していた東大自治会（武井昭夫委員長）であった。こうして、同年六月十五、六両日には、全国の官公立大学、高専校自治会の代表者会議が開かれ、国学連は発展して、全国官公立大学高専学生自治連盟（官公学連）となり、その席で六月二十六日のゼネスト実施が決定されたのである。横浜経専（高商）の自治会もこの決定に従ったわけで、スト参加校は百十四校、学生数約二十万人におよんだ。一方、早大学生自治会のイニシャティブのもとに、私学の学生自治会も横のつながりを深めて、同年七月に全国私学学生自治会連合（私学連）が結成され、この私学連と官公学連との提携によって、同年九月、ついに全国学生自治会総連合（全学連）が誕生するにいたった。経専の学生自治会（学友会）も学生大会を開いてこれに加盟を決議、その後大きな社会的勢力のひとつとなる全学連の運動で、重要な役割を果たすにいたるのである。

第五章のための資料

年表——昭和二十年（一九四五年）八月～同二十四年（一九四九年）三月

年	月・日	本校関連事項	月・日	社会経済状況
昭和20年	9・	授業を再開	8・30	マッカーサー元帥、厚木に進駐
	9・	進駐軍が本校グラウンドに進駐、占拠	9・2	降伏文書に調印、GHQ（連合軍総司令部）設置
	9・	経専（高商）第二十回卒業式挙行、卒業生一八八名	9・11	戦犯容疑者第一次逮捕
	9・	軍関係学校・外地学校の生徒八四名の転入学を許可	9・26	三木清獄死
			9・27	天皇、マッカーサーを訪問
	10・	学校報国団解散	10・4	GHQ、治安維持法・国防保安法・特高警察の廃止、政治犯の釈放、天皇制批判の自由を指令
			10・10	徳田球一ら政治犯三千名出獄
			10・11	GHQ、五大改革（男女同権、労働組合結成の奨励、教育の自由化、専制政治からの解放、経済の民主化）を指令
			10・21	戦後第一作映画「そよかぜ」（松竹）封切、主題歌「りんごの歌」大流行
	11・24	岡野鑑記校長退職、文部省視学官糸魚川祐三郎氏が第	11・2	GHQ、財閥解体を指令

昭和21年	12・	三代校長に就任	12・16	近衛文麿元首相服毒自殺
		長期食糧休暇を実施	12・31	GHQ、修身、日本史、地理の授業停止指令
			12・	日銀券発行高五百億円を突破
	2・	授業開始	1・1	天皇神格否定・人間宣言
	3・	修業年限三年制に復帰	1・4	軍国主義者の追放はじまる
	3・	授業料二四〇円に値上げ	2・	第一次農地改革実施（1日）、金融緊急措置令公布（17日）、預金封鎖、旧円と新円の交換開始（25日）
	3・	横浜工業経営専門学校廃止、同校在籍生徒は経専（高商）の相当学年に編入	3・5	米国第一次教育使節団来日
	4・	第二十三回入学式を挙行	4・10	婦人参政権による最初の総選挙実施
	9・19	対高工野球定期戦復活	5・	メーデー復活（1日）、極東軍事裁判開始（3日）、食糧メーデー（19日）、第一次吉田内閣成立（22日）
			10・	ニュールンベルグ戦争裁判判決・戦犯一二名絞首刑（1日）、日本史授業、スミぬり教科書で再開
		この年より学生のアルバイト黙認となる	11・3	日本国憲法公布（翌年5月3日施行）
			12・27	南海地方に大地震
昭和22年	1・	文部省、高専入学者選抜試験要領を発表	2・	全官公労共闘委、二・一ゼネスト宣言（18日）、GHQ指令で中止（21日）
	2・	大学昇格準備委員会成る、『横浜商商新聞』復刊		
	3・	第二十一回卒業式挙行、卒業生一三九名	3・	トルーマン・ドクトリン声明
	4・	第二十四回入学式挙行、入学者一六〇名、授業料四〇	4・	教育基本法・学校教育法実施、六・三・三・

年	月・日	本校関連事項	月・日	社会経済状況
昭和22年	11・14	横浜商商祭を行なう		四制はじまる(1日)。総選挙で社会党第一党となる(25日)
	11・	大学昇格期成迎盟設置		片山哲内閣成立(1日)。米、マーシャル・プラン声明(5日)。日教組結成(8日)。主食の遅配が全国平均二〇日に及ぶ(20日)
	12・	糸魚川校長、大学設置委員会の常任委員となる	6・	独占禁止法施行
		○円となる	7・20	東京地裁山口判事、配給生活を守って栄養失調死
昭和23年	2・	官立商専校志願者の進学適性検査実施される	10・11	「東京ブギウギ」一世を風靡、歌謡曲全盛期を迎える
	3・	第二十二回卒業式挙行、卒業生二一三名	10・	コミンフォルム結成
	3・26	教育復興をスローガンに他の官立大学高専に同調、本校学生団体、同盟休校	11・15	不敬罪と姦通罪廃止
	6・4～5	対高工野球最終定期戦に商商ストレート勝ち		
	6・	投業料一二〇〇円に値上げ、本校学生団体値上げ反対の同盟休校(26日)		
	8・6	復活第三回全国専門学校野球大会に優勝	1・26	帝銀(椎名町支店)毒殺事件起こる
			3・10	芦田内閣成立
			6・13	太宰治、愛人と玉川上水に投身
			6・26	投業料値上げ反対で国公私立大、高専二二〇校学生一せいスト
			6・	コミンフォルム、ユーゴを批判
			7・	小学校教科書検定制実施。大韓民国成立
			9・	朝鮮民主主義人民共和国成立(9日)。全学連結成大会(18日)。昭電疑獄事件起こる(30日)
			10・19	第二次吉田内閣成立
			11・12	東京裁判判決・東条英機ら絞首刑に
			12・19	マッカーサー、経済安定九原則を指令
昭和24年	2・28	寄宿舎(富士見寮)一棟復旧(六〇名収容)	1・23	総選挙、民自党過半数を占め、共産党も進出
	3・	経専(高商)第二十三回卒業式挙行、卒業生一七六名	3・7	ドッジ・ライン指令
	3・	横浜高商自治会新発足(新規約成立)		
昭	9・25	大学設置委員会視察団、本校等を実地調査		
	11・14	全国高専野球大会に優勝。高商二十五周年記念祭行なわる		
	12・	日本学術会議議員に黒沢教授選出される。『商学』復刊第一号発刊、富士見寮再建工事に着手		

○授業料等の推移

(単位 円)

年次別 / 種別	検定料	入学金	授業料	備考
大正十三年	五	一	五〇	一年三回(一八、一八、一四ずつ)払い
大正十四年	五	一	六五	一年三回(二五、二〇、二〇ずつ)払い
大正十五年	五		六五	〃
昭和二年	五		六五	〃
昭和三年	五		六五	〃
昭和四年から	五	一	八〇	年三回(三〇、二五、二五ずつ)払い
昭和二十一年	五	二	二四〇	三月から値上げ
昭和二十二年	五〇	四	四〇〇	四月から値上げ
昭和二十三年	一〇〇	一〇〇	一、二〇〇	六月から値上げ大学は一、六〇〇に
昭和二十四年	四〇〇	一〇〇	一、二〇〇	

○対高工野球定期戦戦績

回次	年度	スコア	勝負(○印商商 ×印高工)
一	大正十四年	4A—3	×
二	大正十五年	5—4	○
三	昭和二年	1—0	×
四	三年	4—2	○
	(昭和四、五年中断)		
五	六年	12A—5 ○、6—3 ○	○

六	昭和七年	3A—2 ○、4—1 ×、10A—1 ○	○
七	八年	7A—1 ○、8A—7 ×、5A—0 ○	○
八	九年	5A—1 ○、5A—3 ×、8—0 ×	×
九	十年	4—3 ×、3A—1 ×	×
十	十一年	4A—1 ×、8—4 ×	×
十一	十二年	4A—3 ○、11—3 ○	○
十二	十三年	22A—8 ×、3—2 ○、8—3 ×	×
十三	十四年	6—5 ×、15—4 ○、5—1 ×	×
十四	十五年	7—4 ○、8—4 ○	○
十五	十六年	11—8 ○、5A—3 ○	○
十六	十七年	5—3 ○、10—7 ×、4—13 ○	○
	(十八～二十年、戦時下中断)		
十七	二十一年	5—5 日没引き分け	引き分け
十八	二十二年	7—6 ×、8—3 ○、9—0 ○	○
十九	二十三年	5—4 ○、3—1 ○	○
通算十一勝七敗一引き分け			

○新岡部実施の学生世論調査（昭和二十二年十一月二十七日）結果

『横浜高商新聞』第百五十五号（昭和二十二年十二月十五日付）は次のように伝えている（一部要約および省略）。

——最近の高商生はいかなる動向を示しつつあるか、先月二十七日行なった第二回世論調査の結果に、その一端が知り得よう。

▽雑誌　本校の特性よりしてか経済雑誌が圧倒的に多い。〔専門誌〕は、『経済評論』三〇%、『経済』二八%、『理論』一五%が目立つ。その他、『経営評論』、『科学と技術』、『エコノミスト』、『ダイヤモンド』等は二～四%を示すにとどまる。〔総合誌〕は、『世界』二〇%、『リーダーズ・ダイジェスト』九%、『改造』、『中央公論』、『前衛』、『人間』、『世界評論』、『展望』がこれにつづく。

▽書籍　〔学術書〕では、『共産党宣言』、『資本論』、『ドイツ・イデオロギー』、『国家と革命』等は動かぬところ。河合栄治郎『社会政策原理』、『学生に与ふ』、岩村光郎『法律学序説』にも読者が多い。〔一般書〕は、ベスト・テンを数えると、①尾崎秀実『愛情は降る星の如く』、②河上肇『自叙伝』、③倉田百三『愛と認識との出発』、④島木健作『生活の探求』、⑤倉田百三『出家とその弟子』、⑥トルストイ『復活』、⑦トレーズ『人民の子』、⑧中野重治『歳月』、⑨小林多喜二『蟹工船』、⑩谷崎潤一郎『細雪』。

▽自治会制度　〔現自治会形態の是否〕是三八%、否四九%にして大部分は現状に不満を持っている。〔代議員制の是否〕是五七%、否一八%。

▽政党観　〔支持する政党〕全学年では社会党二九%、共産党・自由党各一三%、民主党一%。一、二年生では社会党

三一%、自由党は一年一六%、二年二〇%、三年では首位が共産党の三六%で、自由党はわずか三%。なお意見保留が四二%の多数を占める。

▽世界観　〔一年生〕では、①ヒューマニズム一七%、②理想主義一五%、③マルキシズム一二%、④自由主義一一%、その他三三%。〔二年生〕①ヒューマニズム一五%、②マルキシズム・社会民主主義各九%、④自由主義七%、その他五一%。〔三年生〕①マルキシズム二八%、②合理主義一二%、③社会民主主義一〇%、④理想主義五%、その他三二%。

▽大学昇格　〔一年生〕単独案八七%、複合案四%、保留九%。〔二年生〕単独案八〇%、複合案九%、保留一一%。〔三年生〕単独案七二%、複合案一五%、保留一三%。以上の如く単独昇格が学生の総意であるとの結論を得た。

○高商閉校までの卒業生累計

本科	三、八九七名
貿易別科	五五〇名
計	四、四四七名

○入学志願者・入学者数

年度	志願者数	入学者数 中学校卒	実業学校卒	計	倍率
昭和二十年度	四一〇	—	—	一九四	二・一
昭和二十一年度	一、〇六三	一四五	三二	一七七	六・〇
昭和二十二年度	一、〇八〇	一六四	二四	一八八	五・八
昭和二十三年度	一、七九七		—	一七五	一〇・二
昭和二十四年度	五七三		—	一七〇	三・四
昭和二十五年度	一、七七八		—	一八二	九・七

○学生生徒数（昭和二十六年三月現在）

経済学部一年	一八三	ほか休学　九
経済学部二年	一八四	ほか休学　三
経専（高商）三年	一二九	—　（本年度卒業生）
計	四九六	ほか休学　一二

○教職員（昭和二十六年三月現在）

〔役職〕	〔担当〕	〔氏名〕
経済学部長・経専校長	経済史	徳増栄太郎
経専名誉教授		田尻　常雄
（一般教務担当）		

教授	英語	伊東弥	教授
教授	化学	草間時善	教授
教授	人文地理	松尾俊郎	教授
教授	生物	永田義夫	教授
教授	(兼)体育	下津屋俊夫	教授(兼)国際貿易・ドイツ語
教授	(兼)心理	貫名智啓	助教授
教授	(兼)英語	沢崎九二三	助教授
教授	(兼)生物	北川政夫	助教授
助教授	英語	小栗敬三	助教授
助教授	英語	大郷一雄	助教授
助教授	物理	竹内柾	助教授
助教授	数学	石田巌	講師
助教授	歴史	北村忠夫	講師
助教授	(兼)英語	林植太郎	講師
助教授	(兼)哲学	高木勘弐	講師
講師	英語、経済英語	山本己代次	(兼)法律・民法
講師	(兼)仏語	時田清	講師
講師	(兼)西洋文学	山崎栄治	講師
講師	(兼)体育	安仲卓文	助手
(専門教科担当)			助手
教授	経済政策	渡辺郁一	非常勤講師
教授	会計学	黒沢清	非常勤講師
教授	原価計算	山辺六郎	外人講師

教授	簿記原理	沼田嘉穂	教授
教授	財政	井手文雄	教授
教授	統計学・経済統計	伊大知良太郎	教授
教授	経済原論	越村信三郎	教授
教授(兼)国際貿易・ドイツ語		武藤正平	助教授
助教授	会計監査	平栗政吉	助教授
助教授	商品学・工業概論	島田記史雄	助教授
助教授	商学	尾沢徳治	助教授
助教授	商業教学	佐藤信吉	助教授
助教授	商法・公法概論	清水新	講師
助教授	経営学各論	伊藤長正	講師
講師	世界経済論・ロシア語	大崎平八郎	講師
講師	商学通論・工業経営	森弘毅	講師
講師	(兼)中国語	岡本隆三	講師
講師	(兼)法律・民法	山崎邦彦	講師
講師	(兼)金融論	宮崎義一	助手
助手		長洲一二	助手
助手		平田清明	非常勤講師
非常勤講師	衛生理論	井上喜市	非常勤講師
非常勤講師	珠算	山崎与右衛門	非常勤講師
非常勤講師	スペイン語	渡辺登	非常勤講師
非常勤講師	社会学	大垣俊介	外人講師
外人講師	英会話・貿易実務	ジョン・ウィルソン	

(経理教官)			
教授	工業技術	河野五郎	事務官
教授	工業技術	神尾沖蔵	事務官
助教授	商学通論	久保村隆祐	事務官
助教授	英語	郷司敬吾	事務官
講師	公民	平館利雄	事務官
助教授	中国経済	本橋渥	雇
非常勤講師	英語	下山忠夫	事務官
非常勤講師	英語・英会話	徳永良吉	事務官
非常勤講師	保険交通論	勝呂弘	事務官
非常勤講師	英語	小倉卓	事務官
(事務職員)			
事務長	事務官	望月藤三	厚生係長心得
庶務係長	事務官	田中寛一	図書係長
会計係長	事務官	大木平吾	事務官
教務係長	事務官	増田栄喜	
厚生係長心得	雇	鹿田保春	
図書係長	事務官	今村健本	

○富丘会昭南支部の活動

昭和十七年シンガポールが陥落し、日本の統治下に入って地名を昭南市と改称した。治安回復とともに、日本の官庁、民間の会社が進出し、同窓生も数多く軍人として、あるいは軍属・商社マンなどとしてこの地に駐在した。十八年になってキリンビール(当時イギリスのビール工場を管理運営)の芳野一男氏(高商1)が中心となり、南方開発金庫の菊池凌氏(高商3)、燃料廠勤務の阿部義高陸軍中尉(高商13)らが集まり一夜痛飲し、その席上富丘会昭南支部を結成した(支部長芳野一男氏)。十九年には黒沢清先生がジャワ派遣軍の経理指導に出張の途次昭南に立ち寄られたのを機に、一日大いに気勢をあげ歓待した。ある時、横浜高工の同窓会と連絡がつき、ハマの定期戦の再現をクリケットクラブの運動場で行ない、三対二で高商の勝ち。二十年五月芳野一男氏が現地召集を受け、その送別会を兼ねて同窓会が開かれ、民間からはキリンビール、軍関係からは、かの有名なジャイアンツの沢村投手の実弟・沢村正男氏(高商14)がアサヒビールを持ちより、痛飲し、かつ松岡軍個氏(高商12)の美声にきゝほれた。

敗戦とともに昭南支部は消滅した。当時、支部員は十五名以上いたと思われるが、記憶に残っているのは次の各氏である。

(カッコ内は高商卒業回次)

芳野一男(1回)　中島半人(3回)　菊池凌(3回)

辻豊治(9回)　鈴木末好(11回)　田崎正男(11回)

松岡重信（12回）　出合資文（13回）　阿部磯高（13回）
泉　正男（13回）　沢村正男（14回）　原田　深（17回）
天野八郎（18回）

なお、阿波丸に昭南より乗船し、同船が撃沈されたため、不帰の客となられた野田醤油勤務（？）のかたがいる。また、戦後、出合・阿部・原田の三氏は逝去された。（資料提出・芳野一男・沢村正男・天野八郎の三氏）